

宮之脇遺跡発掘調査報告書

岐阜県教育委員会
可児町教育委員会



①川合遺跡

②宮之脇遺跡

③牧野小山遺跡

ごあいさつ

可児町内には多くの遺跡が点在しているとともに、重要な遺跡が多く知られる地域でもある。今回発掘調査された宮之脇遺跡も遺物包含地として知られていたが、過去に地元と名古屋鉄道株式会社との間にこの土地を開発する条件があり、ここに名古屋鉄道従業員教育センターの建設計画が立案され、ここにも遺跡の保存と開発との関係が問題となりながら、保存への良策が見出せない現在、その敷地内に円墳一基が現状保存されることは不幸中の幸いと言えよう。しかし決してこれで満足できるような現状ではないが、一步一步の前進と今回の調査報告書が文化財に対する認識の一助となることを願ってやまない。

発掘調査および整理事業に努力を賜った調査団の方々及び地元関係者に深謝して御挨拶とします。

昭和51年3月

岐阜県教育委員会

教育長 横山 勉

序

名古屋鉄道株式会社が従業員教育センターを当町川合地内に建設されることになりました。当町教育委員会がこの予定地を踏査しましたところ、古墳などの遺跡があり、埋蔵文化財の存在することが確認されましたので、県教育委員会文化課へ報告、協議を重ねたところ、敷地内の周知の古墳は整備保存することとし、建造物建設地を中心に記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。

今回の発掘調査にあたり、可児町宮之脇遺跡発掘調査団を結成、その調査を実施することにしました。

直接の調査には、日本考古学協会員大江命氏を主任調査員とし、調査員として岐阜県考古学協会員大江上氏、中島勝国氏、可児綱平氏等の参加を得ることができました。

調査は順調に進み幾多の学術的成果を挙げることができましたのは、調査団を始め県関係者、町教育委員、町文化財審議委員の方々や、直接作業に携っていただいた地元婦人会などの協力者、財的援助を賜った名古屋鉄道株式会社を始め、その他多くの方々の協力によって発掘調査を完了したのであり、御礼申し上げますと共に、貴重な資料をまとめ報告することが、今後の研究の資料となれば幸いですと考えています。また報告書の作成に当って労を煩わした大江命主任調査員をはじめ、大江上、中島勝国、可児綱平各調査員諸氏に深く感謝の意を表します。

昭和51年3月

可児町宮之脇遺跡発掘調査団長

可児町長 林 桂

例 言

○岐阜県可見郡可見町川合地区，埋蔵文化財宮之脇遺跡地域内に，名古屋鉄道株式会社従業員用教育センターが建設されることになったため，昭和49年4月より昭和50年3月までの期間にわたって調査を行なった報告書である。

本文中のグリットはDであらわした。挿図中のDは土壌の意である。

○発掘調査団の構成は下記の通りである。

<p>団 長</p> <p>主任調査員 日本考古学協会</p> <p>調査員 岐阜県考古学会員</p> <p style="text-align: center;">" "</p> <p style="text-align: center;">" "</p> <p>調査補助員</p> <p>県文化課</p> <p>教育委員</p> <p>文化財審議委員</p> <p>事務局 長</p> <p>事務局 長代理</p> <p>事務局 担当</p>	<p>林 桂</p> <p>大江 命</p> <p>中島 勝 国</p> <p>大江 上</p> <p>可兒 鋼 平</p> <p>可兒 貞 子</p> <p>波多野 寿 勝</p> <p>堀井 丑 男</p> <p>奥村 一 美</p> <p>可兒 恒 三</p> <p>金子 数 雄</p> <p>金子 一 郎</p> <p>稻垣 雄 之 助</p> <p>上野 兎 司</p> <p>日比野 義 博</p> <p>奥村 智 咲</p> <p>只腰 左 門</p> <p>長瀬 茂 八</p> <p>堀 純 宝</p> <p>安藤 寿 作</p> <p>吉田 利 世 子</p> <p>大 森 寿 子</p> <p>丹 羽 利 男</p> <p>渡 辺 登</p> <p>斉 藤 春 一</p> <p>森 川 益 三</p> <p>統 木 正</p> <p>奥 谷 一 勝</p> <p>平 田 録 郎</p> <p>可 兒 一 郎</p> <p>小 沢 末 広</p> <p>森 久 雄</p> <p>田 口 茂</p>
---	---

目 次

巻頭 遺跡附近の航空写真

ごあいさつ

序

例 言

まえがき..... 8

遺跡の地形と概要..... 9

遺跡周辺の考古学的環境..... 11

発掘経過..... 13

層序と出土状態..... 17

遺 構..... 20

住 居 址

古 墳

土 城

集石遺構

溝状遺構

出土遺物..... 44

縄文式土器

弥生式土器

土師式土器

須 恵 器

歴史時代の遺物

土 製 品

石 器

鉄 器

自然遺物

ま と め..... 83

図 版

挿 図 目 次

挿図1	遺跡附近の地形図……………10	挿図22	土壌実測図……………42
挿図2	故只腰教育長を中心に現場 会議……………14	挿図23	中期前葉土器……………45
挿図3	土層断面図……………17	挿図24	出土土器拓影……………46
挿図4	土層断面図……………18	挿図25	出土土器実測図及び拓影……………48
挿図5	第1号住居址実測図……………20	挿図26	出土土器実測図及び拓影……………49
挿図6	第2号住居址実測図……………21	挿図27	出土土器拓影……………50
挿図7	第3号, 4号住居址実測図……………23	挿図28	出土土器実測図及び拓影……………52
挿図8	第6号, 7号住居址実測図……………24	挿図29	出土土器拓影……………54
挿図9	第5号, 8号, 9号, 10号 住居址実測図……………26	挿図30	出土土器実測図及び拓影……………55
挿図10	第11号住居址実測図……………27	挿図31	出土土器実測図……………57
挿図11	第12号, 13号住居址実測図……………29	挿図32	出土土器実測図……………58
挿図12	第14号, 15号住居址実測図……………30	挿図33	出土土器実測図……………60
挿図13	第16号住居址実測図……………31	挿図34	出土土器実測図……………61
挿図14	第17号住居址実測図……………32	挿図35	出土土器実測図……………62
挿図15	第18号住居址実測図……………33	挿図36	出土土器実測図……………70
挿図16	第19号住居址実測図……………34	挿図37	出土土器実測図……………71
挿図17	遺構関連図……………35	挿図38	出土土器実測図……………72
挿図18	方形墳基底部実測図……………37	挿図39	出土土器実測図……………75
挿図19	方形墳基底部石積状態……………38	挿図40	出土土器実測図……………76
挿図20	鉄器実測図……………39	挿図41	出土土器実測図……………80
挿図21	古墳及び遺物実測図……………40	挿図42	出土土器実測図……………81
		挿図43	出土土器及び土製品実測図……………82

図 版 目 次

- | | | | |
|------|--|------|-----------------|
| 図版 1 | 発掘以前の遺跡の状態
遺跡の全景 | 図版13 | 弥生式土器 |
| 図版 2 | 第2号住居址, 第3号住居址,
第1号住居址内の出土状態, 第
2号住居址内の出土状態 | 図版14 | 弥生式土器, 土師器 |
| 図版 3 | 第5, 8, 9, 10号住居址, 第
11, 12, 13号住居址, 第17号住
居址 | 図版15 | 土師器 |
| 図版 4 | 第19号住居址内の炉址, 第18号
住居址内の出土状態, 第17号住
居址内のカマド | 図版16 | 土師器 |
| 図版 5 | 第3号墳, 第5号墳, 第2号墳 | 図版17 | 土師器 |
| 図版 6 | D7における濠内の層序, 濠内
の出土状態, 集石遺構 | 図版18 | 土師器 |
| 図版 7 | 第2号住居址内出土状態, 土壌
墓内出土状態, 須恵器出土状態 | 図版19 | 土師器 |
| 図版 8 | 縄文式土器 | 図版20 | 須恵器 |
| 図版 9 | 縄文式土器 | 図版21 | 須恵器 |
| 図版10 | 縄文式土器 | 図版22 | 須恵器 |
| 図版11 | 縄文式土器 | 図版23 | 須恵器 |
| 図版12 | 縄文式土器 | 図版24 | 須恵器 |
| | | 図版25 | 須恵器 |
| | | 図版26 | 中世陶器 |
| | | 図版27 | 平安灰袖陶器, 中世陶器 |
| | | 図版28 | 石鏃, 石錐, 打製石斧 |
| | | 図版29 | 磨製石斧, 石器類 |
| | | 図版30 | 石錘 |
| | | 図版31 | 砥石 |
| | | 図版32 | 石包丁, 玉類, 滑石製模造品 |
| | | 図版33 | 直刀, 土偶, 土錘, 鉄鏃 |

まえがき

岐阜県可児郡可児町大字川合字宮之脇に立地する宮之脇遺跡は、木曾川の左岸に発達した段丘上にあり、昭和40年8月30日に縄文式晩期の遺物が発見されたことにより、遺跡が再確認された。この附近は古くより遺物包含地として知られている地域である。また遺跡の西方に円墳が現在している。大正時代から昭和初年にかけて開墾作業が行なわれ、その折に直刀が出土したと言いつづられている。なおこの直刀の出土した地点は雨が降ると血の池のように赤くなったとの古老の話である。なお、直刀について調査したが所在不明である。

今回この地点に名古屋鉄道株式会社が教育センターを建設することになり、発掘調査を施行する運びとなり、前記の調査団が編成され、大江が調査主任に依頼され、昭和49年4月15日より同年10月22日に終了したのである。この期間中に発掘調査区域の拡張等があった。また、岐阜県教育委員会による第2回発掘技術者講習会の実習が8月1、2、3日に行なわれた。講師に大参義一、八賀晋、伊東太作、波多野寿勝、徳松正広の諸氏によって実地指導が行なわれた。

調査地点は南北の主軸にそって4㎡のグリットを設定して調査を行なった。調査の結果、縄文時代、弥生時代、古墳時代以降中世に至る遺跡・遺物が検出されたのである。

調査は猛暑の時期を含めて長期間に亘って行なわれ、この期間直接関係のある町教育委員会社会教育課を始め、町当局、調査員の各位を始め、昭和46年度北裏遺跡調査より遺跡の調査ごとに測量班の一員として参加された、大森寿子、可児貞子両女史には、特に作業時間外におよんで道具のあとかたづけまで願った。また吉田英敏氏はたびたび調査の手伝および教示を得た。また遺跡の一部の写真を撮るに当って中部電力関営業所の協力を得たのである。また汗と疲労と低賃金の中で協力された作業協力者のことをわすれてはならない。冬季に水洗に参加された可児貞子・渡辺三千子両女史その他名鉄関係者、県教育委員会、岐阜県考古学会の稲垣雄之助、松田典夫、伊藤克司諸氏を始め多くの方々より協力、助言等を賜った。報告書作成に当って上記の各位に御礼申し上げる次第である。

また報告書の完成を待たずして他界された。特に文化財行政に理解の深かった只腰左門前教育長をしのび深く感謝し御礼申し上げる。

尚、特に多くの方々の方力によって得られた記録遺物等の資料について、これを直接管理、保存される行政関係者の良心の問題として、たとえ一片の破片でも充分なる保護、管理、公開を講ぜられることを報告書の刊行に当って強く提起する次第である。 (大江 命)

遺跡の地形と概要

宮之脇遺跡は、岐阜県可児郡可児町大字川合字宮之脇に所在する。

可児町は、岐阜市の東方約30kmのところ^{註1}に位置し、東は同郡御嵩町、南は多治見・土岐の両市に、北は木曽川をはさんで美濃加茂市と、西は愛知県犬山市と接している。

可児町川合は、美濃加茂盆地のほぼ中央^{註1}にあって、木曽川と飛騨川との合流点の左岸にある。美濃加茂盆地は、中央を木曽川が西流し、それに上述の飛騨川をはじめ、可児川・加茂川などの中小河川が合流している。木曽川をはじめとしてそれらの河川の開折によって数段の河岸段丘が発達している。この河岸段丘は、木曽川左岸の可児郡においては、標高120m程の高位段丘、標高100m程の中段段丘、標高80m内外の低位段丘の三段に大別される。

川合地区は、低位段丘の高位よりの第2面^{註1}にあって、標高は、85m内外である。木曽川との比高は約20mで、段丘崖となっている。遺跡の近くの青木神社裏より少し下ったところの段丘崖に、年中濡れることのない相当量の湧水がある。

今回の発掘地点は、広く平坦なる面で、表土はいわゆる御岳泥流の堆積物が腐植土化した通称「黒ぼこ」と呼ばれている黒土層である。

段丘崖から10mほどの地点では、大体、35cm～60cmの黒土層の下に砂礫層となっているが、段丘崖より50mほどはなれた地点では、35cm～45cmの黒土層、50cmほどのシルト質砂層^{註2}それぞれについて砂礫層となっている。

発掘地点の土地利用は、東接に青木神社の参道が南北にあって、明治の頃までは森林であって、一部が多治見・土岐方面の窯業地への薪の荷上場であったと言われる。大正初期に開墾され、その際に、やや大型の古墳が煙滅している^{註3}。

また、最近は、一部が土地買収後に畑作を放棄し荒地となった時期が数年あったが調査直前では、再び開墾され、野菜・里芋・杉・檜等の栽培がおこなわれていた。なお、畑の北塊地などは、笹・雑草などが生え込まないように深く溝状にしてあって、そこへごみなどを捨てていたような箇所が見られた。

(中島勝国)

挿図1 遺跡附近の地形図



×印は遺跡の遺跡

- 注1. 低位段丘は5段に細分化される。
2. 建築にともなうボーリング調査結果より。
3. 川合地区の林惣兵衛氏談。

参考文献 関道明「美濃加茂盆地の段丘、とくに中位段丘とその堆積物」—名古屋地学第25号
岐阜県・愛知県「飛騨・木曾川自然公園調査書」—1960—

遺跡周辺の考古学的環境

可児町の考古学的環境を考察すると、縄文時代の遺跡・遺物包含地は、土田地区を中心に現在までに8カ所、数えられる。

- | | | |
|------------------|-------------|--------------|
| (1) 北裏(土田) | (2) 宿(土田) | (3) 富士野井(土田) |
| (4) 袖裏(土田) | (5) 井之鼻(土田) | (6) 坂戸(春里) |
| (7) 川合(宮之脇遺跡も含む) | (8) 徳野(今渡) | |

いずれも木曾川・可児川沿いの河岸段丘に位置し、徳野包含地のみ中位段丘面で、他は低位段丘面に位置している。

宮之脇遺跡より南へ約200m隔った地点で昭和34年5月に道路建設中に縄文時代の住居址が見出され、名古屋大学考古学教室の澄田教授等によって住居址一基分だけ調査され加曽利E式土器のみを伴う住居址が確認されている。また、昭和40年8月には、今回調査した地域内から当時の中学生の手によって縄文時代晩期の合口壟棺と思われるものが見出されている。このように、川合地区一帯に広く遺物を表面採集することができる。

次に弥生時代について見ると下記の6カ所が現在のところ確認されている。

- | | | |
|--------------|-------------|------------------|
| (1) 北裏 | (3) 富士野井 | (7) 川合(宮之脇遺跡も含む) |
| (9) 禅台寺山(今渡) | (10) 山岸(広見) | (11) 久々利銅舞出土地 |

北裏遺跡の一部は昭和46・47年にわたった調査で、水神平式土器・貝田町式土器・高蔵式土器などが確認されている。禅台寺山遺跡からは、弥生時代の最終末と思われる土器が採集されているが、現在は大部分宅地となっていて確認することは困難である。

古墳時代に入ると、当地域は数多くの古墳が造営され、その数、規模から見ても美濃の拠点の一つであったと思われる。

代表的なものをあげれば、

- | | | |
|------------------|-----------------|-----------------|
| (12) 身廻山古墳群(広見) | (13) 前波古墳群(中恵土) | (14) 熊野古墳(広見) |
| (15) 渡・八幡古墳群(土田) | (16) 次郎兵衛塚(川合) | (17) 羽崎中洞古墳(平牧) |

などである。

身廻山古墳群は、白山・御獄の二古墳で、石製腕飾の鍔形石・車輪石、内行花文鏡など数多くの副葬品・その立地(山頂にあって自然の地形を利用)などから前II期末のものと考えられている。^(注1)残念なことは、近年、町水道貯水地・団地造成などによってその景観が変ったことであ

る。また長塚古墳群の長塚・西寺山・野中の各古墳のうち野中古墳は、明治の頃に破壊され現在は墳丘の一部を残すのみであるが竪穴式石室、副葬品の三角縁獣鏡の出土などから考え前Ⅲ期のものと思われる。^{注2}

当、川合地区にも以前はかなりの数の古墳があって、土田・渡地区から川合地区までの木曾川沿いには若干の空白地はあるが連続して古墳が存在していたという。この川合地区は、その東端にあたるわけである。今回調査した地内にも大正期の開墾する前にやや大型の古墳が一基あったと伝えられている。また東南へ約200m隔ったところに次郎兵衛塚^{注3}という封土がこわされ、近年までは石室まで開口していたが今は埋っている。川合地区の東端には狐塚という長さ80mほどの前方後円墳が大正期の開墾によって破壊されたという。調査地内の西に接した名鉄教育センター敷地内の一基の小円墳が現状保存されることとなった。また、南へ200mほどの所に川原石で石室などが造営されていたのが四基ほど存在していたことが確認されているがいずれも煙滅している。

東山道の各務駅から可児駅の径路は、今後地内を通過していたと考えられている。

なお、周辺の丘陵地には、平安灰釉から山茶碗の古窯址がかなりの数で分布しているし、久々利の大萱、大平には、桃山期の志野・織部の名品を焼いた古窯も残っている。(中島勝国)

注1 旧岐阜県報10

2 旧岐阜県報3

3 旧岐阜県報8

参考文献 岐阜県史 原始編

発掘経過

発掘調査に至る経緯

遺物包含地として以前から周知されていた可児郡可児町川合字宮之脇1816の1・5・15・16番地に名古屋鉄道株式会社が従業員用教育センターを建設することになり、従って埋蔵文化財の立場から記録保存のための発掘調査を実施するまでの過程を次のとおり報告します。

昭和48年7月10日、県教育委員会文化課波多野主任が来町され、周知された遺跡として確認されている地域に名鉄従業員用教育センター建設計画がなされるため、その建設予定地を予備調査する。8月11日名古屋鉄道株式会社より提出された教育センター建設に係る埋蔵文化財発掘調査申請書を受付する。8月30日可児町役場にて、名鉄教育センター開発事前協議会を行なう。

昭和49年3月13日可児町役場にて、県文化課、名鉄、可児町教委で発掘調査について打合わせを行なう。3月16日発掘調査の主任調査員を日本考古学協会員大江侖に依頼し、調査方法等についての指示を受ける。

4月13日県文化課、名鉄、調査員、町教委の間で、町教委にて、可児町宮之脇遺跡発掘調査に関して協議会を行なう。これにもとづいて、4月15日～16日発掘現場へ道具の運搬、テント設営等の発掘調査の準備をする。4月17日県文化課、名鉄、調査員、町教委、地元代表者、土地所有者、作業員らの立会いのもとに、可児町宮之脇遺跡発掘調査を開始する。

以上のような過程を経て、可児町宮之脇遺跡発掘調査を行なうことになった。(田口 茂)

調査経過の概要

前記のように発掘調査は4月15日より開始したのである。発掘調査日誌、調査員のメモ等より大略を抜粋して記述する。調査は南北軸に沿って4㎡のグリットを設定して、4月18日よりそのグリット設定の部分で除土の運搬等を考慮して調査を行なったのである。4月20日現場において調査員会議を行なう。表土除去地点を選定して行ない、その上で更に方針を検討して、調査を進めることにする。4月25、26日E9～10地点に表土層下にピットが検出される。この地点は表土除去すると川原石等が散乱していた。遺物は小破片の縄文、弥生、土師器などの小破片が出土する。またピットは後世の攪乱でその底部より、ガラス製のノリのビンが出土し



押図2 故只藤教育長を中心に現場会議（4月20日）

た。4月26日E11の地点より管玉が1個出土する。4月27日F10地点に石積が見られる。この石積は南に傾斜していた。表土も従ってやや傾斜を示している。この地点を中心に調査を行なう。この調査地点中5月11日北西のA9地点に石積（方形墓基底部）築造によって、住居址の半分以上が削られているが、第1号住居址が検出されたのである。（以下住居址の番号は本来ならば発掘順に付けるべきであるが整理上の番号に随って記する。）

5月14日B10地点でピットが認められ、縄文中期の小破片が少量出土した。5月16日A8を中心とした地点に川原石の散在する所があり、これは黄色土層上に密着したものはなく黒色土層上に浮いているものが大半であり、配列されたような部分と乱れた部分があり、その石の間には縄文土器の破片、打製石斧が出土した。他に土師器片も見られた。また、5月18日A9の地点は終戦後のビニール製のものが深さ1.5m程の地点より出土し攪乱されていることが知られた。5月28日D13地点の壕の部分が深く黒色土層上層に山茶碗が出土した。また下層は須恵器の杯、蓋などが見られる。6月2日発掘調査会議を現地にて開く。今後の調査計画、また調査上の諸点について協議する。

6月3日H11地点にサバ石が見られる。6月7日～10日G11地点に溝が認められ、G10の地点に同じ溝が走っていることが知られた。6月12日G13地点に3号住居址が検出された。住居址の北に楕円形のピットが見られ山茶碗片が出土する。このピットは中世の土壌墓と考えられる。7月13日柱穴の検出を行なう6月20日～25日に第3号住居址の東G14を中心とした地点に4号住居址が検出される。この住居址の北面の部分に楕円形のピットが検出される。これも山茶碗片が出土し、上部より住居埋没後に掘込まれた土壌墓であろうと思われる。6月29日現場にて調査員会議を行ない発掘地点の拡張部について協議を行なう。調査補助員として亀谷泰隆

が参加する。7月4日I10、J10に住居址が複合している所が知られる。5号、6号、8号住居址であり、この部分は切合等を調べるために少人数で調査を行なう。8号住居址が5号住居址によって切られていることが知られた。7月9日J12の地点で縄文式中期の完形土器が出土する。この付近は特に縄文時代の遺物が集中して出土している。完形土器の出土等により、附近に縄文時代の住居址の存在が考えられた。7月12日K11の地点にカマド及び17号住居址の一部が検出される。7月13日K8、9の地点に7号住居址の一部が知られる。7月16日に第5号住居址の北東部に10号住居址が知られる。この住居址は5号住居址によって、その一部が切られている。

7月20日J1・2に第14号住居址が存在することが知られたのであるが溝状と複合しているため保存状態はあまりよくない。J3、J5に溝状遺構が検出された。7月21日I4、5に15号住居址が検出される。またG3の地点に石組遺構が検出される。縄文式時代の遺構か古墳期の遺構か色々問題が提起される。7月23日E5、6の地点にてS字口縁を有する土器片が多く出土する。住居址の可能性が強い。7月26日2号住居址の西に溝が南北に走っていることが知られる。7月28、29日I5、6の地点に16号住居址が検出される。また15号住居床面より小形の土器が出土する。D13地点の濠の基底部より完形の杯が出土する。

8月1日～3日県発掘技術者講習会が発掘現場で行なわれる。大参義一、八賀晋、伊東太作、吉田豊、各務義章、波多野寿勝、徳松正広等の諸先生によって行なわれた。

8月3日・4日に9号住居址のプランを追う。またI12の地点に縄文土器片が多く出土する。先日の完形土器と関連するものと考えられる。8月5日方形墓の西側濠の底部より、須恵器片が多量に出土する。I12の地点に縄文時代の石囲の炉址が知られる。住居址の壁面が確認されないが、黄色土層面にある平地住居址と考えられる。8月6日I、11、12の趾を除去する9号址の北部にカマドの痕跡を示す赤色化した焼土面が認められる。8月16日E3に第4号古墳の基底部残存部が検出される。8月20日～22日C3・D3地点に3号墳の基底部の残存部が検出され、石室内より、小形の土器が出土する。実測等を実施する。8月23日B5土器が多く出土する。8月24日E5を中心とする第2号住居址のプラン及び柱穴を検出する。実測図をとる。8月28日から9月2日まで1号墳のセクション等はずし、基底部の清掃を開始する。その他現在までに出土した遺構等の清掃を行なう。

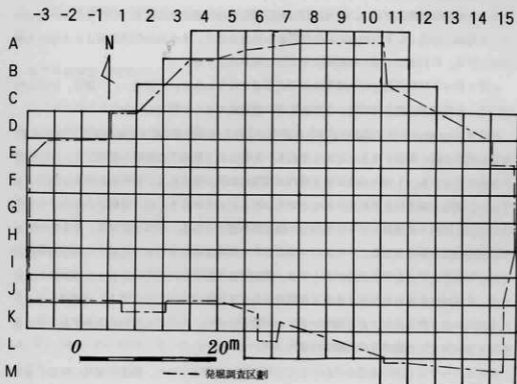
9月4日～7日I15の地点を中心にして12号住居址が確認された。調査区域外の東部にも住居址の存在が考えられる。9月16日L9の第17号住居址の西南の外の楕円形のピット内より、中世期の山茶碗及び片口大鉢が完形で二個出土する。

9月17日18日、J12、13 K12、13の地点を掘り進むにつれ11号住居址のプランが明確にされる。この住居址は西部に張り出をもつ住居址であることが知られた。またK15に13号住居址が

確認される。9月21日～24日K7の地点に川原石を二段に積んだ石組が見られ、これが古墳の石室部の残存部であり、長方形をなし南に伸びていると考えられるので、1m程区域外にかかっているため地主の了承を得て、この部分のみ調査したのである石室内部より直刀が出土し、羨道部より長頸瓶が出土する。9月25日調査員会議を開き今後の方針を立てる。期日の延期を名鉄関係者に申し入れることにする。方形墳全体の葺石の平面測量を始める。10月1日～5日遺構の再確認を行なう。床面下に遺構の有無を調査する。10月7日遺構の清掃して、全景写真を撮る。10月8日～21日まで測量班のみで遺構の全体測量を行ない、10月22日テント、道具等を引上げる。最後に野菊一輪と浄水を遺跡にささげ、4月以降長期に亘る発掘調査を終了した。

(可児鋼平)

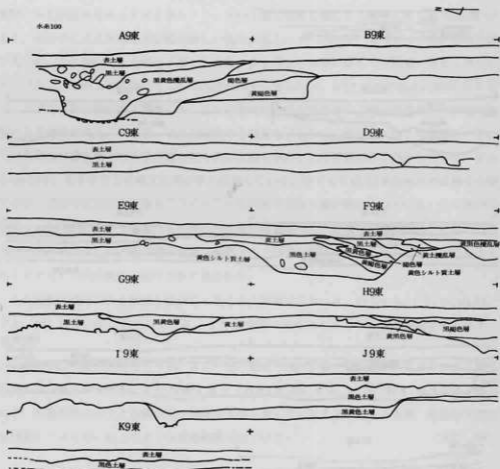
グリット設定表



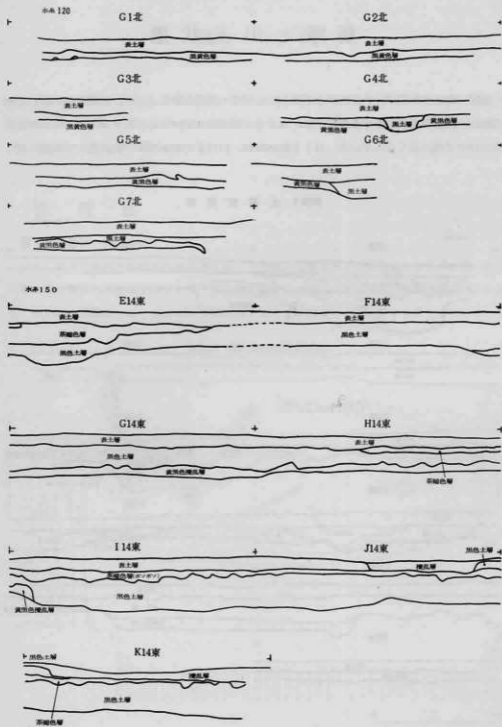
層序と出土状態

遺跡における層位は、大正時代より昭和にかけての開墾作業によって、ほぼ平坦に近い状態であり、発掘調査前における測定では、A9gで標高83m45cmでありL9gで83m27cmで比高差が18cmで南に低くなっている。H1g83m01cm、H15gで83m38cmで比高差が37cm西へ低く

挿図3 土層断面図



挿圖4 土層断面図



なっている。前述の地形の項において述べた様に御岳火山灰による黒色有機物堆積層（黒色土層）、黄色シルト質砂層、礫層という順序で見られる。設定グリットの-3、-2、-1.1gの地点は黒色有機物堆積層直下にほとんど黄色砂層がなく礫層が見られる層序を示している。東に移行するに従って礫層が下り、したがって黄色シルト層をはさみ黒色有機物堆積層も厚くなっている。

南北の層は黄色シルト砂層が方形墳丘基底部の見られる地点でやや高くなっている。遺構は主として黄色シルト質砂層に基盤を有して検出されたものである。

発見された遺構は1、2の例外を除いて黄色シルト質砂層を基盤としている。D10、11gを中心に検出された方形の古墳の基底部の濠は礫層部まで掘込まれていてその部分に礫層と基底を区分する為に横にやや大きな川原石を列べて区別している。この濠の部分の埋没の状態と遺物の出土状態を見るとF9g東セクションの土層で明瞭な様に表土層下に黄土層（攪乱層）があり、その中には山茶碗など比較的新しい遺物が見られ、その附近の下8.9gは下部に黒色土層が見られ、その層中でも比較的下部に須恵器が多く出土し礫層に接して大形甕片が多く出土したのである。このように濠にそって須恵器の出土が見られた。D12、13gの地点に杯類、またB6、7gに高杯の類が多く出土した。また方形墳基底部の残存部の上層の黒色層より祭祀に関係のある遺物が出土している。また住居址の中でE5gを中心に見られた第2号住居址においては床面及び覆土層中にS字口縁の見られる土器を中心に非常に多く出土している。またI12、13g、E9gなどに縄文土器が多く出土している。中でもI12、13gの地点では縄文土器片が多く第19号住居址内で層もプライマリーな状態で完形土器が検出されている。この他楕円形ピット（土壌墓）の中でもF13gに見られたものは黄色シルト砂層は明瞭に掘込みが見られ完形の山茶碗が出土した。また溝状遺構は黄色シルト砂層を掘込んで造られている。中でもI4～I6gなどに山茶碗の小破片が多く見られた。

また発掘区域内の出土状態を総括的に見ると山茶碗はG5～8、H5～9、I7、8、10、11、J9、10、11gに多く出土している。また須恵器は先に述べたように濠の周囲に多く出土している。

石器の中で打製石斧はA7～10、B8～10、C8～11、D5～11、E9、F8gに多く見られ表土及び覆土中である。また石錘はA9・B8、9、10、C3、4、11、D8、9gに多く見られる。打製石斧の出土と石錘の出土地点が大体一致していることが知られるが、整地等で表土が移動しているが、以上のような調査結果が出ている。 (大江 命)

遺 構

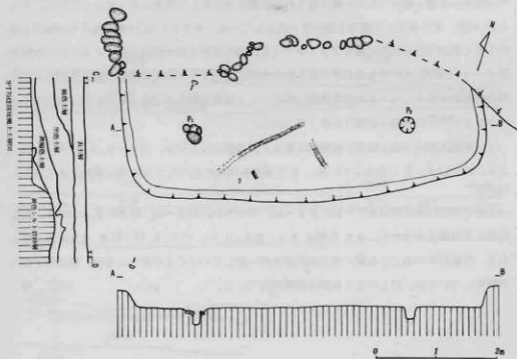
本遺跡から19軒の住居址、古墳石室の一部が四基、周濠を有する方形墳丘の基底部一基、石組遺構、溝状遺構、土壌などの遺構が検出されたのである。これ等の遺構の中には複合遺構も見られるが、以下上記の順によって述べることにする。

住 居 址

第1号住居址（挿図5）

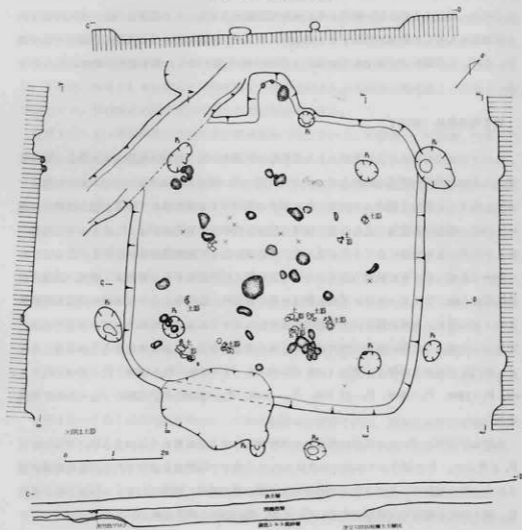
B 8、9の地点に検出された住居址は、方形墳丘の基底部と周濠によって大半が削られている。残存部より基盤面の黄色シルト質砂層を凡そ41cm掘込んで構築された堅穴住居址である。残存部の南壁添いの一辺は536cmを計測することが出来た。床面はやや硬化していた。床

挿図5 第1号住居址実測図



面下は約5cmで礫層に達している。床面上に炭化木材片が帯状に見られた。その炭化物の下はうすく赤褐色化している箇所が認められた。火災等による燃焼の状態を示すものと観察された。また遺物中石包丁が2個(完形)出土し、1個は床面上より、他の1個は火熱による割目が見られ表面に炭素が付着している。柱穴は2カ所検出されたのである。南西の隅の柱穴の周囲に川原石によって補強したものと考えられる3個の石が検出された。深さはP₁-20cm, P₂-29cmである。出土遺物として床面上に壺形土器の底部(挿図28の38), また床面より約5cmほど上に高杯の脚部(挿図32の8)が出土している。いずれも欠山期と推定されるものである。その床面より10cm~20cmの覆土中にS字口縁台付変形土器片(挿図34の2)などが出土している。この住居址は石包丁などより考慮して弥生期と推定される。

挿図6 第2号住居址実測図



第2号住居址（挿図6，図版2，図版7）

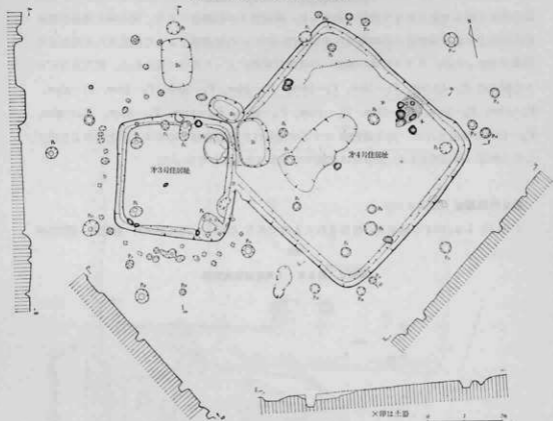
E59の地点を中心にして黄色シルト質砂層を15cm～20cm掘込み北西—東南を主軸とする。隅丸長方形のプランを示す堅穴住居址である。床面は全面に硬化面が認められる。4個の柱穴が見られる。また北壁にそい柱穴1個が見られる。柱穴及び屋外ピットの深さは $P_1-15\text{cm}$, $P_2-11\text{cm}$, $P_3-12.5\text{cm}$, $P_4-12\text{cm}$, $P_5-15\text{cm}$, $P_6-30\text{cm}$, $P_7-16\text{cm}$, $P_8-8.5\text{cm}$, $P_9-18.5\text{cm}$, $P_{10}-20\text{cm}$ が検出された。南壁の一部に後世の攪乱によって壁面にピット状に掘込が見られる。また西壁の一部が溝状の遺構によって削られている。西北の部分に張出が見られる。壁は黄色シルト層に15cm～20cm掘込まれている。住居址の床面上に川原石が散在している出土遺物は床面上より復元可能な土師器が5個を含めて十数個体（挿図33の1～11，挿図34の3～5.13.20.22，挿図31の4.5.14，）（挿図32の17.～19.21.24）その他の破片が出土している。川原石の下になっているものと同一個体のももかなり認められた。この住居址内の一群の土器は出土状態よりしてこの住居に伴出するものと考えられる。上部の覆土中の土器は小破片であり縄文，土師，山茶碗などが出土している。土師式土器は第I型式と第II型式の範疇のものである。

第3号住居址（挿図7）

G139の地点を中心にして検出された住居址で，黄色シルト砂層の基盤面を，およそ15cm程掘込み主軸を北東—西南に長軸を置きほぼ四角形に近い隅丸方形のプランをなす堅穴住居址である。第4号住居址と切合っている。この切合の部分はやや壁が乱れているが僅かに壁面が残っている。床面は硬化面が見られる。柱穴は住居址内に5カ所知られる。 P_6 はカマドの部分と考えられる。また壁外に小ピットが北，南，西の壁に沿って28個検出されている。深さは8cm～18cmである。更にその四隅のほぼコーナーの外側に柱穴状のピットが南東，南西，北西の部分に認められ，このピットはいずれも掘込み内に見られ，主柱中心より約40cmの間隔を測定することが出来る。北東の部分は山茶碗片が出土したピットによってこわされているので検出出来なかったが，これ等の外部の柱穴は隅木を支える役をなしたものではなからうかと考えられる。柱穴及びピットの深さは $P_1-11\text{cm}$, $P_2-20\text{cm}$, $P_3-17\text{cm}$, $P_4-18\text{cm}$, $P_5-10\text{cm}$, $P_6-8\text{cm}$, $P_7-14\text{cm}$, $P_8-16\text{cm}$, $P_9-21.5\text{cm}$, $P_{10}-19\text{cm}$, $P_{11}-20\text{cm}$, $P_{12}-28\text{cm}$, $P_{13}-9\text{cm}$ が検出された。

北壁の中央部の P_5 左の部分に硬化した部分が張り出し更に東に立石が見られ，その間に P_6 が見られ，その部分より木炭片が検出された。カマドの位置と推定される。また周溝が見られた。出土遺物は，このカマドの部分で土師器の甕の破片（挿図35の6）が出土している他は，覆土中に小破片の須恵器が出土しているが，流れ込みと考えられる。

挿図7 第3号・4号住居実測図



第4号住居址（挿図7）

第3住居址に北東の部分で複合している。G14 β の地点を中心にして長軸が北西—東南に526cm、北東—西南に465cmの隅丸長方形のプランを示す住居址であり東壁にそってカマドが見られたが、床面は硬化された部分でもカマドの近くは赤く焼けている。柱穴は9カ所見られる。壁にそって周溝が検出されたのである。中央の掘込みが見られたところは貼床が見られる。柱穴及びピットの深さは、P₁—14.5cm、P₂—19cm、P₃—18.5cm、P₄—16cm、P₅—14.5cm、P₆—17cm、P₇—21cm、P₈—20cm、P₉—21cm、P₁₀—13cm、P₁₁—12.5cm、P₁₂—10.5cm、P₁₃—15cm、P₁₄—14.5cm、P₁₅—8.2cm、P₁₆—12.5cm、P₁₇—11.5cm、P₁₈—16.5cm、P₁₉—16cm、P₂₀—15cm、P₂₁—16cm、P₂₂—26.5cmが検出された。出土遺物はカマドの南の部分で、復元によって器形の知られる甕（挿図35の4.7）と甎（挿図31の12）が出土している。

第5号住居址（挿図9）

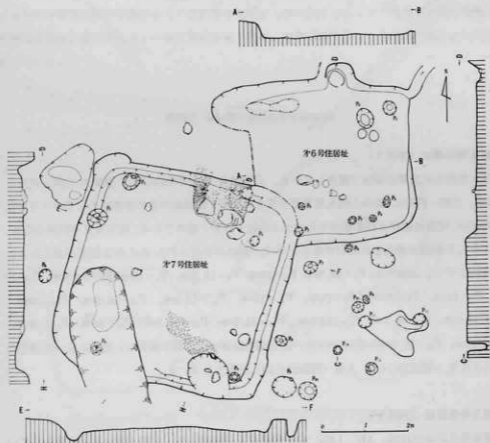
第5号住居址はH10、11、I10、11 β の地点より検出され、長軸が東に約45°傾むいてい

て、長軸574cm、短軸535cmであり、黄色シルト砂層を25cm掘込んだ堅穴住居址である。床面は硬化面がまばらでありあまり良好でなかった。床面直下が砂礫層である。南の隅の部分が第8号住居址との切合の部分の住居廃棄以後の時代(中世)に石組遺構によって攪乱された為あまり明確でなかったが、カマドは東の壁沿いのほぼ中央南によった部分に見られた。柱穴及びピットの深さは P₁-12.5cm, P₂-18cm, P₃-14cm, P₄-25cm, P₅-19cm, P₆-16cm, P₇-43cm, P₈-15cm, P₉-10cm, P₁₀-18cm, P₁₁-15cm, P₁₂-20cm, P₁₃-11cm, P₁₄-29cm, P₁₅-40cm, P₁₆-18cmが検出された。出土遺物はカマドの見られた附近及びそのカマドの土の中より出土した土師器(挿図35の1.3)のほかは小破片で見るべきものがなかった。

第6号住居址(挿図8)

I 9, 10, J 9, 10の地点より検出されたものであり、長軸北一南に353cm、短軸東一西325cm

挿図8 第6号・7号住居址実測図



黄色シルト砂層を約40cm南壁で約25cm掘込んだ隅丸方形竪穴住居址である。床面はやや北に傾斜を示している。また床面上に川原石が見られた。

柱穴及びピットの深さは、 $P_1-18\text{cm}$ 、 $P_2-10\text{cm}$ 、 $P_3-14\text{cm}$ 、 $P_4-12\text{cm}$ 、 $P_5-13.5\text{cm}$ 、 $P_6-9\text{cm}$ 、 $P_7-12\text{cm}$ 、 $P_8-15\text{cm}$ が検出された。北西の隅には凹が見られた。ここに柱穴が存在したと考えられるが床面の残存状態がよくないため明瞭でなかった。

出土遺物は床面より約10cm～20cm上の覆土中にあるが、縄文、土師器、須恵器、山茶碗などの小破片が出土し、出土状態も住居廃棄後の流込みと考えられる。

第7号住居址 (挿図8)

J 8, 9, K 8, 9の地点に検出された。長軸東に約25°傾き450cm短軸は443cmであり、南壁で15cm北壁で25cm黄色シルト砂層を掘込んだほぼ方形に近い竪穴住居址である。北東隅の第6号住居址との切合の部分床面は、黄色がブロック状に混っている。さば石を使用し赤色化したカマドが認められた。北壁の部分よりこの切合の部分は小石混りの黄黒色が見られ、壁面は明確に検出されなかったが、この部分は第6号住居址の南西の隅にあたる部分を小石混えて強化したものである。柱穴及びピットの深さは、 $P_1-18\text{cm}$ 、 $P_2-9\text{cm}$ 、 $P_3-12\text{cm}$ 、 $P_4-13\text{cm}$ 、 $P_5-20\text{cm}$ 、 $P_6-22\text{cm}$ 、 $P_7-40\text{cm}$ 、 $P_8-10\text{cm}$ 、 $P_9-16\text{cm}$ 、 $P_{10}-17\text{cm}$ が検出され、住居の南西の部分に攪乱による南からの掘込みが見られるため壁の一部はくずされていた。その中に柱穴の痕跡を留めている。

出土遺物は床面上も壁土中も小破片のみであって、カマドの部分に見られる土器片はいずれも縄文・土師器などの小破片であって、カマドの築造の時に補強の為に使用されたものである。カマドの東の部分に杯片が出土しているが流込みである。

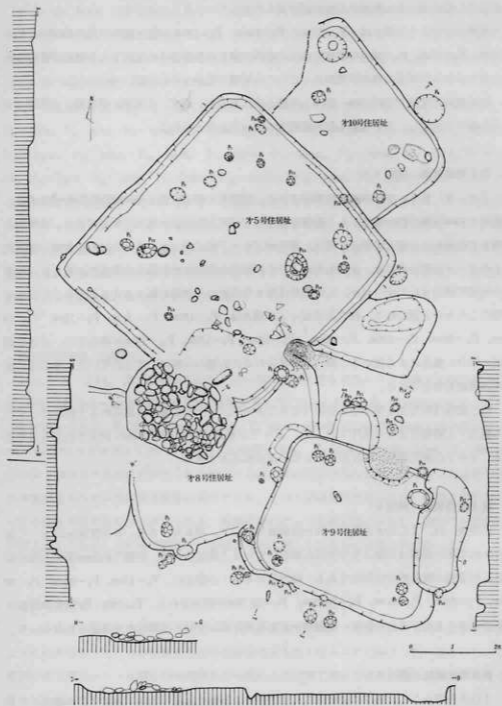
第8号住居址 (挿図9)

Iの10, 11, Jの10の地点に検出された住居址であって、第6号, 5号, 9号住居址によって切合されて更に長軸は北軸よりやや西に傾むいていると推定される。南壁で約20cm黄色土層を掘込んだ方形の隅丸竪穴住居址である。柱穴及びピットの深さは、 $P_1-13\text{cm}$ 、 $P_2-24\text{cm}$ 、 $P_3-20\text{cm}$ 、 $P_4-23\text{cm}$ 、 $P_5-6\text{cm}$ 、 $P_6-28.5\text{cm}$ 、 $P_7-25.5\text{cm}$ が検出された。 P_1 、 P_2 、 P_3 がこの住居に関係のあるものと考えられる。遺物はいずれも細片化していて主要なものは見られなかった。

第9号住居址 (挿図9)

J 11を中心とした地点に検出された黄色シルト砂層を北壁で22cm、東壁で27cm掘込んだ長軸は北西—東南564cm、短軸は北東—西南414cmの竪穴住居址である。北壁の部分にカマドの位

插图9 第5号·8号·9号·10号住居址实测图

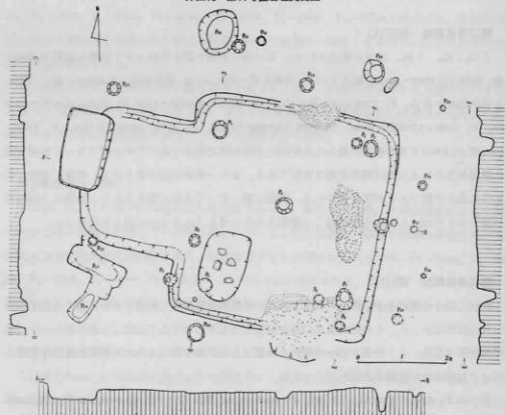


置を示す焼土が見られる。柱穴及びピットの深さは、 $P_1-15\text{cm}$ 、 $P_2-13\text{cm}$ 、 $P_3-19\text{cm}$ 、 $P_4-8\text{cm}$ 、 $P_5-15\text{cm}$ 、 $P_6-11\text{cm}$ 、 $P_7-11\text{cm}$ 、 $P_8-25\text{cm}$ 、 $P_9-30\text{cm}$ 、 $P_{10}-10\text{cm}$ 、 $P_{11}-10\text{cm}$ 、 $P_{12}-18\text{cm}$ 、 $P_{13}-10\text{cm}$ 、 $P_{14}-20.5\text{cm}$ 、 $P_{15}-10\text{cm}$ 、 $P_{16}-9\text{cm}$ 、 $P_{17}-21\text{cm}$ 、 $P_{18}-15.3\text{cm}$ 、 $P_{19}-23\text{cm}$ 、 $P_{20}-28.5\text{cm}$ 、 $P_{21}-30\text{cm}$ 、 $P_{22}-35\text{cm}$ 、 $P_{23}-15\text{cm}$ が検出された。東壁の部分に長方形に掘ったピットが認められるが、これは上部より掘込まれている為に山茶碗片などの混入が認められ、非常に軟かく後世の攪乱と考えられる。また、三隅の柱穴は後に建替か補強のためか二次ずつとなっていた。

第10号住居址 (挿図9)

G11, H11の地点に検出され、第5号住居址によって大半を切られているが、プランは黄色シルト砂層を6~8cm掘込んだ堅穴の住居址であり、残存部の西壁の一部が攪乱によって土層が乱れている。柱穴の深さは、 $P_1-16\text{cm}$ 、 $P_2-31\text{cm}$ 、 $P_3-14\text{cm}$ 、 $P_4-23\text{cm}$ が検出された。住居内のサバ石はカマドに使用されたと考えられるが、発掘調査時の所見によるとカマドの位置と決めることは困難である。遺物は全て破片であり、甕の胴部から口縁部にかけての破片があるが、(挿図34の15)この住居址に直接関係のあるものと考えすることはできない。

挿図10 第11号住居址実測図



第11号住居址 (挿図10)

J 12, 13, K 12, 13の地点に見られる黄色シルト砂層を掘込み北壁で約10cm前後の掘込み、北東隅の附近で次第に消滅している。西の部分で約8cmの掘が見られる。東部及び南東の部分は壁が認められず周溝のみが見られる整穴の方形の住居址で、西部に長方形の張出が見られる。北-南475cm東-西650cmである。

ピットは屋内に認められる。柱穴及びピットの深さは、P₁-13cm, P₂-15cm, P₃-14cm, P₄-15cm, P₅-8cm, P₆-15cm, P₇-46cm, P₈-11cm, P₉-23.5cm, P₁₀-21cm, P₁₁-18cm, P₁₂-39cm, P₁₃-12cm, P₁₄-40cm, P₁₅-23cm, P₁₆-20cm, P₁₇-10cm, P₁₈-7cm, P₁₉-13cm, P₂₀-26cm, P₂₁-45cm, P₂₂-22cm, P₂₃-14.5cm, P₂₄-12cm, P₂₅-25cmが検出された。また南東部に硬化面が見られる部分よりやや傾斜を示しながら壁外まで延びている。この地点が入口であったと考えられる。この附近のプランはあまり明確にとらえる事は出来なかった。また南西の隅に浅い随円形状の掘込みが見られたが、この中に石が見られた住居埋没後のものと思われる。張出の部分の西壁に垂直に近いようなピットは、これは上部より土が軟かく後世農耕等によって掘込まれたものと考えられる。

第12号住居址 (挿図11)

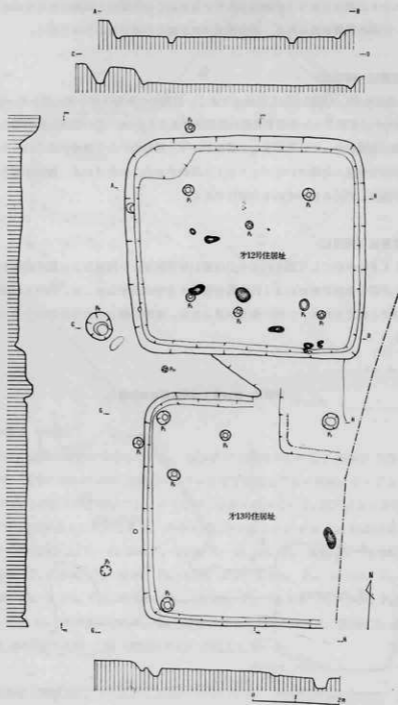
I 14, 15, J 14, 15で検出された。北-南に主軸を置き黄色シルト砂層を北壁で40cm前後、南壁では18cm~30cmを掘込まれた、長軸を東-西に517cm、短軸を南-北475cmの整穴の隅丸方形住居址である。P₁ 23cm×24cm深さ15cm, P₂ 30cm×25cm深さ12cm, P₃ 18cm×15cm深さ22.5cm, P₄ 23cm×17cm深さ4cm, P₅ 22cm×20cm深さ12cm, P₆ 21cm×19cm深さ12cm, P₇ 19cm×19cm深さ13cmの7本の柱穴が見られる床面は北西の隅の部分で乱れてやや深くなって地層下部の礫層が見られる以外は残存状態は良好である。また一部硬化面が見られる。西壁に補助の支え柱の為か不明であるが凹が見られる。周溝は壁にそって全面に認められた。遺物は土師器片が覆土中より出土したのみで直接この遺構のものと考えられるものは見られなかった。

第13号住居址 (挿図11)

K 14, 15の地点を中心にして検出された。発掘調査区域外で参道にかかる為に全貌を知ることが出来なかった。この住居址も12号住居址方向も全くならんで北軸より西に傾むいて、北壁残存部で黄色シルト砂層を15cm南壁約5cm掘込んだ状態で検出された方形隅丸整穴住居址のプランを示すものと推定出来る。

柱穴は P₁ 34cm×29cm 深さ17.5cm, P₂ 24cm×23cm 深さ22cm, P₃ 30cm×25cm 深さ13.5cm,

插图11 第12号·13号住居址实测图



P₁ 32cm×29cm深さ28cm, P₂ 30cm×26cm深さ24cm, また P₂ の見られる地点に浅い掘込みが見られ、これがその部分にピットが検出されているためこの住居址と関連のあるものかは多少疑問がある。全面に周溝が見られる。遺物覆土中に小破片が見られるのみである。

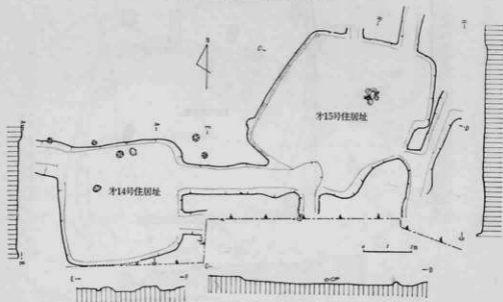
第14号住居址 (挿図12)

J 2 9 の地点を中心に検出された住居址であり、住居址の主軸はやや西に傾き北—南465cm, 東—西に460cm の方形プランを有する堅穴住居址であることが、この住居址の東壁より北西隅にかけて溝状遺構が走っているのとまた黄色シルト土層が浅いので礫層が見られ、そのため床面等の遺存状態が悪く北壁ぞいにピットが1カ所検出されたのみである。遺物は覆土中には各期のものが混出しているがいずれも少破片である。

第15号住居址 (挿図12)

I 4, J 4 9 を中心にして知られるものは第14号住居址より複雑な上に溝状遺構と複合しているためか非常に保存状態がわるく柱穴等を検出する事が出来なかった。残存した壁の状態より堅穴住居址と推定される。一部に集石が見られた。遺物は覆土中より各期の土器小破片が出土している。

挿図12 第14号・15号住居址実測図



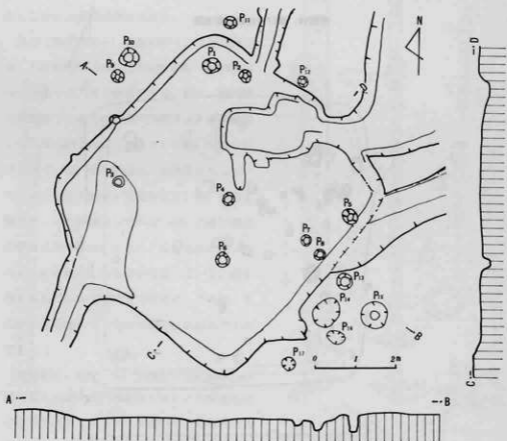
第16号住居址 (挿図13)

H 5. 6, I 5. 6 ㄱ の地点に検出された黄色シルト質砂層を、北一西の壁で20cm, 南一東の壁で18cm掘込んで、北東一南西に長軸を置き628cm, 短軸は北西一南東に592cmの隅丸長方形プランをなす堅穴の住居址である。北東の溝状遺構が三条, 南西に一条が見られるために、遺構の遺存状態はあまり明瞭でない。

また、住居址内の北東に方形のピットが掘られている。柱穴及びピットの深さは、P₁-12cm, P₂-12cm, P₃-5cm, P₄-9cm, P₅-8cm, P₆-8cm, P₇-18cm, P₈-29cm, P₉-10cm, P₁₀-15cm, P₁₁-8cm, P₁₂-10cm, P₁₃-50cm, P₁₄-19.3cm, P₁₅-30cm, P₁₆-24cm, P₁₇-8cmが検出された。

出土遺物は床面上に小破片の土師器が出土しているが住居址と時期を知ることは出来ない。

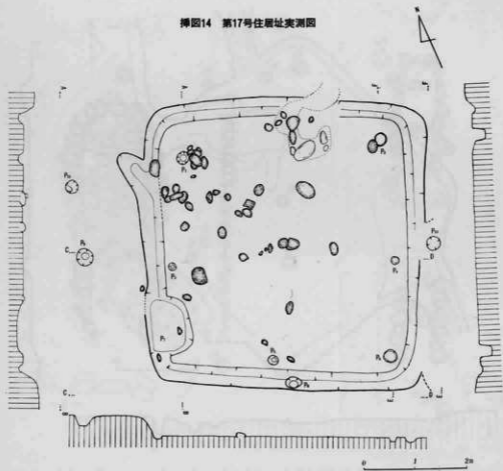
挿図13 第16号住居址実測図



第17号住居址 (挿図14)

K 10, 11, L 9, 10, 11 の地点に検出された主軸が東に約40°傾き、長軸は北東—南西が525cm、短軸は506cmで黄色シルト砂層を北東の壁で21cm南西壁で27cm掘込んだ方形の竪穴住居址である。北東の壁の中央やや東よりにサバ石及び土器片粘土によるカマドが見られた。また周溝もほぼ全面に見られた。P₁, P₂, P₃, P₄, P₆ は柱穴ではほぼ垂直に見られた。P₅ は他の家屋の構造上と他の柱穴の位置より考えて柱の位置と考えられたが、深さ約12cm程のビットである。北西の壁の一部に補助柱を立てたのではなかろうかと考えられた。柱穴及びビットの深さは、P₁—17cm, P₂—25cm, P₃—7cm, P₄—14cm, P₅—8cm, P₆—25cm, P₇—12cm, P₈—10cm, P₉—17.5cm, P₁₀—8cm, P₁₁—16.5cmが検出された。出土遺物はカマド内及びその東がわ及び前部に土師器の甕 (挿図34の8, 挿図35の2) が見られた。その他須恵器及び土器片が覆土中より出土している。

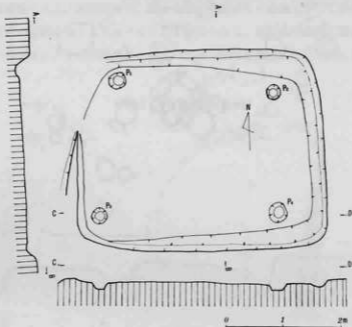
挿図14 第17号住居址実測図



第18号住居址 (挿図15)

L 11, 12gの地点に検出された黄色シルト質砂質を約20cm掘込んだ。東西に主軸を有し東西329cm, 北—南約360cmの隅丸長方形の住居址であり, 東壁, 北壁, 南壁に周溝を有し柱穴は4本検出され, 住居址の西壁の一部は第17号住居址と複合され17号住居址によって切られているためこの部分はあまり明確に検出する事が出来なかった。柱穴及びピットの深さは, P₁-20cm, P₂-17.5cm, P₃-17cm, P₄-16cmが検出された。遺物は覆土中に土師器の小破片が見られた。

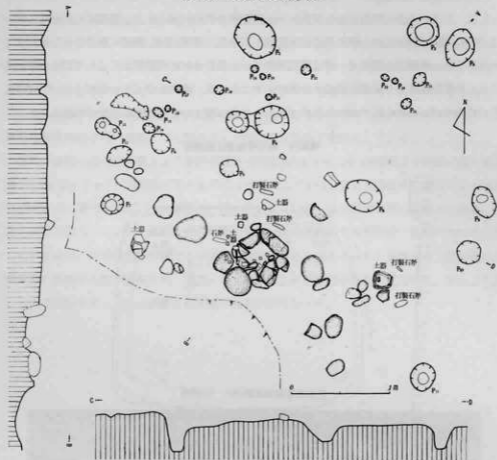
挿図15 第18号住居址実測図



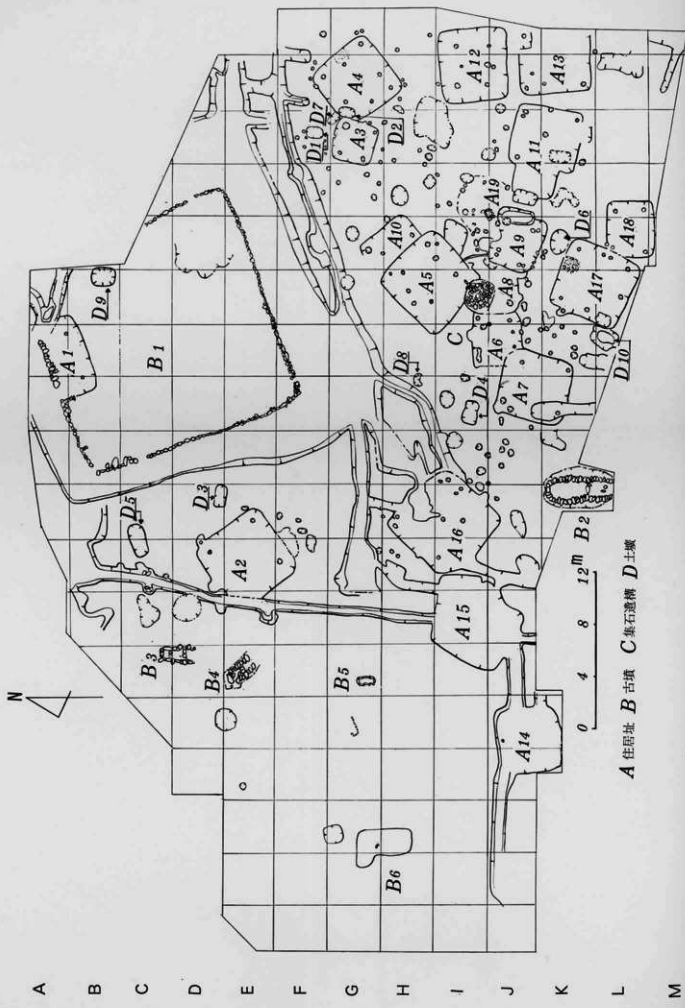
第19号住居址 (挿図16)

プランは明瞭にする事は出来なかったが, I 12gの地点に14個の川原石, 石囲いの炉址が知られた。その炉址の附近及び中に縄文加曽利E式土器片が見られたが, 出土状態より住居廃棄以後の流れ込みである。打製石斧等が出土したのと, その床面上より完形土器が出土している。これは周冊の石及び石斧などの出土状態より, この住居址の時期のものとして推定される。この住居に関係すると思われる柱穴が見られる。この炉址の南の部分に第9号住居址があり, それによって切られている。柱穴及びピットの深さは, P₁-35cm, P₂-16.5cm, P₃-13cm, P₄-26cm, P₅-9.5cm, P₆-16cm, P₇-13.5cm, P₈-18cm, P₉-40cm, P₁₀-21.3cm, P₁₁-26.5cm, P₁₂-27cm, P₁₃-16cm, P₁₄-10.5cm, P₁₅-6cm, P₁₆-4cm, P₁₇-5cm, P₁₈-7cm, P₁₉-6cm, P₂₀-35cm, P₂₁-45cm, P₂₂-45cm, P₂₃, P₂₄, P₂₅が検出された。

插图16 第19号住居址实测图



-3 -2 -1 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15



A 住居址 B 古墳 C 集石遺構 D 土塚

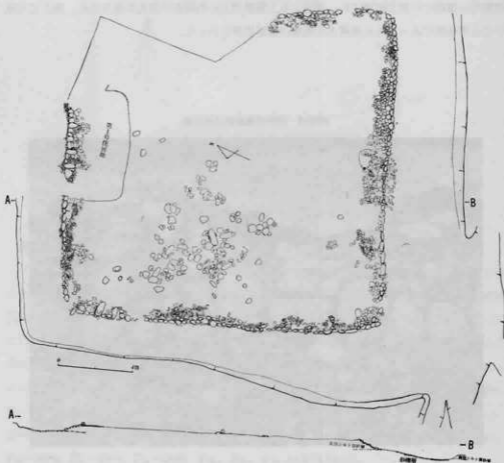
古 墳

調査地区には、方墳の基底部をはじめ、川原石を使って構築された古墳時代の終末期のものと推定されるものが3基検出された。

第1号墳

D9、109を中心とした地点に方形墳の基底部が検出されたのである。この基底部は北東の部分は調査地域外であるのと、道路のため調査出来なかったが、調査によって検出された基底部より方形基底部であると推定出来る。調査地域に検出された遺構よりして東西16m10cm南北17m20cmの方形の基底を有するものであることが知られる。基底部の周囲に濠が黄色シルト質下の深層まで掘込まれ、その砂深層上に横長の30cm～50cm前後の川原石を横に並べ砂深層との

挿図18 方形墳基底部実測図



区別をし、それより約40°弱の傾斜を有しながら川原石を黄色シルト質土層に積上げている。ところによっては挿図19に見られるように長石を縦に用いその間を小石で積んでいるところなどが知られる。またはほぼ同じ大きさの川原石を横に重ねて積上げその間に小さな川原石を不規則に積上げている。その間隔は80cm~100cmほどの区割をしている。濠は狭部で100cm、広部で約90cmであり、西南の部分で別の溝と複合してこの部分は土層も乱れていて明確にされなかった。また基底部の北の部分で弥生式住居址の一部を切りその部分に石積が見られた。またその東部は戦後擾乱され、磁器、ゴム製のカップ等が溝状の中より出土している。

濠内の遺物は北西砂礫層上より高杯須恵器(図版21の2.3.4.5.6)西南隅より南面の濠に須恵器(図版22の1.3.4.7)(図版24の3.4.5.6)などが検出している。中でも図版6の濠内の出土状態の示すように甕(図版22の7)の破片が一面に出土している。また東南の隅の部分より杯身、杯蓋の破片が出土している。濠内の出土状態であるが地点によって比較的同一器種のものが出土している点は、古墳築造後の祭祀との関係を示すものとも考えられる。基底部の上部は後世の開墾等の整地その他で破壊され、黄色シルト質砂層上に川原石の散乱が見られた。表土より浅いとの不規則であったため遺構との関係は確認出来なかった。

挿図19 方形墳基底部石積状態



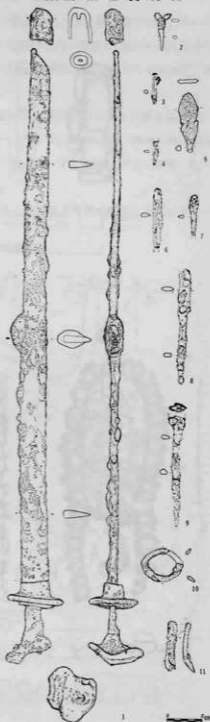
挿図20 鉄器実測図

第2号墳

調査地内の K 6.7, L 6.7g に黄土層を掘りくほめ、川原石を利用して構築された石室と羨道部の一部の基底部が検出された。石室の石積みは、最下段は横に並べその上に縦積みに2段それ以上は、耕作地であったために破壊されている。羨道部は、縦積みで2段、遺存していた。石室は、長さ約2.7m、最大幅約1.3mの楕円形で床面には、棺台に利用したものか石が点在し、奥壁から約0.8m、西壁から約0.3mほどのところから直刀が検出された。

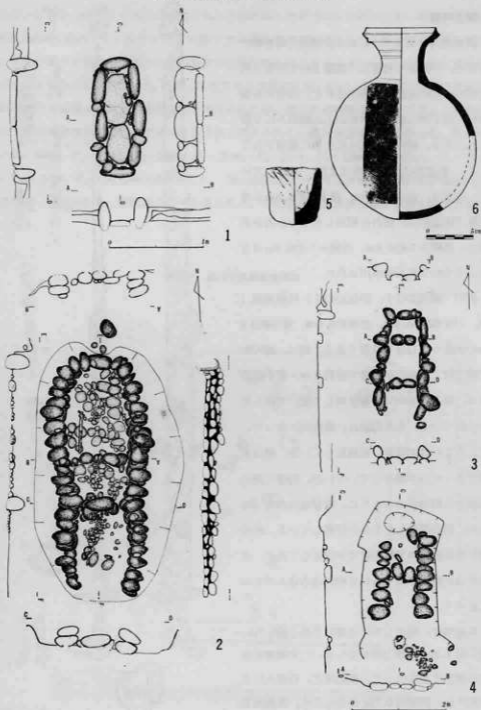
直刀(挿図20の1、図版33の1)は現長88.1cm、刀身部約78.5cm、把部約9.6cm、身巾約3.8cmの平造りの刀身で鉄製である。刃は、楕円形で推定値ではあるが、最大径約9cm、最小径約7cm、厚み約1cmで刀身に対して傾いて取り付けられている。また把頭は、頭椎状になっていて、そこには木質が一部残存している。鞘は木製であったのか遺存していないが、刀身に刃の位置から37cm程のところ、何か金具があったのか、鉄の錆化したものが付着している。鞘の鑑が現長約5cmで楕円状で中空にしてあり、その中央に突起がつくられて鞘にはめ込んだものであろう。

羨道部は、現存している部分で長さ約1.7m、最大幅1.2mで楕円形をなしていたが閉塞石などは検出できなかった。羨道部に、石室入口より約1m、西壁約0.2mのところ、東海地方によくみられるフラスコ状の須恵器の細頸瓶が



1.10は第2号墳4.7は第3号墳8は第5号土壌

挿圖21 古墳及び遺物実測図



1. 第5号墳 2. 第2号墳 3. 第3号墳 4. 第4号墳 5. 第3号墳出土土器 6. 第2号墳出土須恵器

出土している。(挿図21の6, 図版22の2)

第3号墳

C3・D3 9に川原石を横積み2段の石室が検出している。石室内には、石を二個並べたものが1m間隙で二列遺存していたが、これは棺台と思う。また、奥壁と東壁との接する処より、手づくねの小型壺(挿図21の5, 図版19の11)が出土し、また、鉄鏃が奥壁そのの棺台の近くから出土している。鉄鏃(挿図20の4.7)は現長5.8cm 刀部の幅1.4cmである。

第4号墳

第3号墳より南へ3mほど離れて位置し、河原石の縦積された石室の基底部の一部が検出された。ここでも棺台の石並びが検出された。

第5号墳

G3 9の地点に長軸を北南に置いて8個の川原石を持って、長軸154cm、幅50cmの長方形の石囲が検出された。基底層は黄色シルト質層で、掘込みに約10cmのサバ石を2個敷きつめてある。また8個を主体とした石のつき目には、小さな川原石がつけられている。遺構の内の覆土中に5cm内外の小石が少量見られ、また南壁の部分に直径1cm、長さ6cm程の黒色の棒状の土が見られた以外は、遺物は皆無であった。最近、関市の発掘調査などでも知られ、また同町北裏遺跡及びこれに類するものと考えられるが、小児用古墳ではないだろうかと考えられる。

GH 9に古墳の石室の基底部の掘込みが見られた。

(中島勝国)

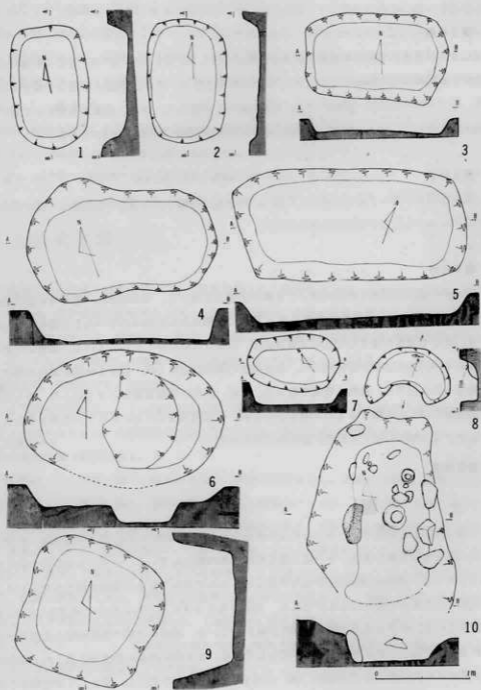
第6号墳

土 壙

土壙(挿図22)と推定されるものが10カ所検出された。挿図22の1.7は、第3号住居址の北壁外に見られるものであり黄色シルト質土層を約20~30cm掘込んでいる。いずれも山茶碗の破片が混入している。同図2は第4号住居址内に見られるものでありこれも山茶碗の破片が見られる。

同図3はD6 9に見られるものである。同図4もI8 9に見られるもので同図5はC5, 6 9に見られる。いずれも山茶碗の小破片が混入している。同図6は第17号住居址の北壁外に見られるものでありこれにも山茶碗片が出土している。また同住居址の西壁外に見られる同図10の土壙中より大平鉢及び山茶碗が二個、口を合わせた状態で出土し、墓としての性格を示すものと考えられる。(図版7の中段)また上部に置かれたと考えられる石が壙内に流れ込んでいる。また同図8はG8 9の三日月状なもので、鉄鏃が覆土中に見られた。同図9は方形墳

挿圖22 土壤実測図



基底部の上の北東部に検出されたものであり、黄色土層を60cm程掘込んだものであり、墳中の覆土よりは縄文土器の小破片が出土したのみである。

以上土壌について明確なプランを有するものであり、これ等の中で同図8.9は別として、ほぼ楕円形状をなし長軸がほぼ南北または東西に向いていることが知られる。また山茶碗片及び完形品などの中世期の遺物伴出している点と、長軸の長さが大きいほうで約80cm～200cm、小形のもので約100cm～150cmの範囲におさまる。これ等を総合して一、二の例外があるが土壌墓と推察出来る。この他にも土壌と思われるものがあるが、遺存状態が悪く明確にすることが出来なかった。

集石遺構

図版6に見られるような第8号住居址及び、第5号住居址内に床面をわずか掘り込み複合して集石遺構が検出されたのである。約30cm～50cm程の川原石を集めている石の下には凹はなく中央部の石が少し盛り上っている程度である。集石の端の方の石の下に山茶碗が一個出土している。また集石の上部の覆土中より山茶碗の破片などが、またその他中世陶片が検出された。

溝状遺構

挿図17に見られるように、-2 J 9よりJ1. J2 9に見られる第14号住居址を横切り第15号住居址より北に向い第2号住居址の西壁の一部を切ってB5 9に至るものと、第15号住居址・第16号住居址より方形墳基底部の西南隅の濠に向って三条の溝が連結しているが遺存状態が明瞭でない部分もある。また方形墳基底部の濠の南に一条のU字状の溝が見られるが、これも方形墳基底部の西南隅で連結している。本来は別個の溝かもしれないが、この部分は土層が乱れていて明確に把握する事が出来なかった。

(大江 命)

出 土 遺 物

今回の発掘調査によって得た出土遺物は縄文式土器、弥生式土器、土師式土器、須恵器、歴史時代の遺物（須恵器、灰釉陶器、中世陶器）、土製品、石器類、鉄器類の順に記述する。

縄文式土器

縄文式土器は第19号住居址の床面上より完形土器が一個出土しているのと、その住居址の石囲炉の覆土及びその附近より出土した以外は、小破片の土器が遺跡全体より他の遺物と混出している。その量は縦38cm、横58cm、高さ14cmの整理箱に約2箱分である。これ等の土器を文様、形態等によって分類して考察する。

中 期

1類（挿図24の1～7，挿図23の左下端を除く）

貼布隆帯の上にヘラ状工具によって刻み目を施したもので、色調は黄茶褐色、赤褐色である。同図1，2は隆帯及び口唇部に刻目を施し、また内面に隆帯を有しそこにも刺突及び刻目がみられる。器厚は0.5cm前後である。同図3～7は隆帯及び口唇部に荒い刻目が施文されているものもある。

2類（挿図24の28～32，挿図26の26）

a ^{図1} 船元Ⅲ式に類似する土器で、隆帯が文様状に施され、頸部が無文になるものと隆帯と隆帯に沿って櫛描線が施されているもので、隆帯は剝離しやすい。また胎土に砂粒を含んでいる。

同図29，30は同一個体の土器で波状口縁をなす頸部が内側にくびれる鉢形土器である。色調は灰褐色である。また挿図では不明であるが図版8の2で知られるように隆帯に沿って櫛描線がかすかに見られる。挿図24の28は口縁部に隆帯による格子目を有し、その下に縦に平行する隆帯を持ち、頸部に横走る隆帯が見られる。また挿図24の31，32は隆帯にそって櫛描線が見られる。

b（挿図24の26，27，33～35）

直線と曲線による沈線文また刺突文や短かい沈線文を有するもので、船元Ⅲ式E類に比定されるものである。^{図2}同図26は沈線による直線と曲線と刺突文が見られる。色調は暗褐色である。

挿図23 中期前葉土器



同図27は沈線による曲線が引かれ地文に粗い縄文が見られる。同図33～35は短かい刺突文が見られる。この他に刺突による列点文が見られるものがある。

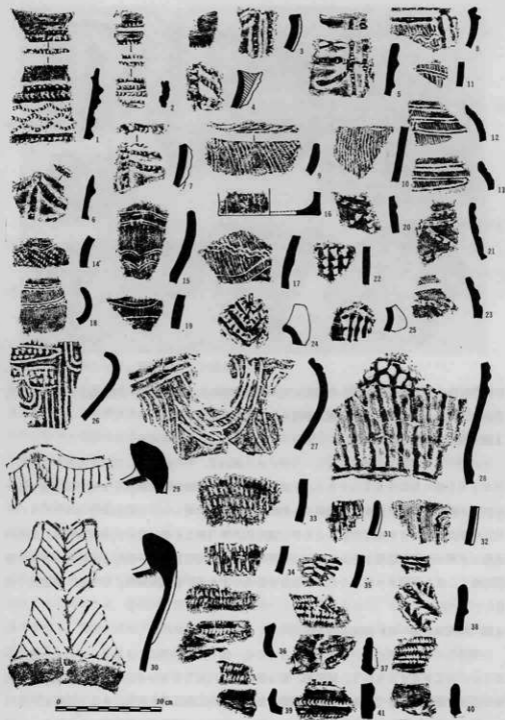
3類 (挿図24の8～19)

主に斜行する燃糸文を地文に有し、竹管による弧状文、平行沈線文、波状文などが見られる里木Ⅱ式土器に類似するものである。小破片で少量であり細分して考察することは困難であり一括して考察する。同図9は口唇部にも燃糸文が施文されている。同図12及び18はキャリパー状の口縁部を有するもので竹管による平行線文及び平行線文の間に波状文が見られる。同図14は地文が縄文で平行沈線が引かれていて一部に爪形文が知られる、一応ここに含めたが多少疑問がある。また同図8は貼りつけ隆帯を有するものである。色調は褐色、茶褐色、黄褐色である。

4類 (挿図24の36～41, 挿図25の5)

中期勝坂式系の土器に近いと考えられるものを一括した。挿図25の5以外いずれも小破片であるが爪形文を有するもので、同図36, 37は装飾的な口縁部をもつものである。色調は茶褐色及び褐色で器厚が厚手である。また挿図25の5は口縁部に無文帯を有し、その下に幅広い隆帯文が見られその一部に三日月状の装飾がなされている。その隆帯文上に沈線が引かれそこに鋸

插图24 出土土器拓影



歯文が見られる。これには五領ケ台的な様相が残されている。器面はよく研磨され、色調は赤褐色である。胎土、その他より勝坂式土器の内に含まれるものと考えられる。

5類 (挿図25の1, 図版10の1)

本類土器は第19号住居址の床面より出土したものであり、他に類例が伴出してない。しかしこの住居址の石囲炉址の上部及び附近より加曾利E式土器片が一括出土しているが住居址に伴出する土器とは考えられないのでここではこの土器のみを本類とした。

器高約19cm胴部で最大幅約12.5cm×10cmの楕円形をなし、両側面に把手を有する、底部が外に張り出す土器である。また文様は口縁部の無文帯下に鈎状の隆帯がめぐらされ段を有しその隆帯より把手が左右対称的に垂れ、また表裏に同じように人面を模したような隆帯文が付けられている。また内面に黒い附着物がある。^{註3}

6類 (挿図24の20~25)

小破片であるが、仮称炉畑I群に比定されるものの破片と推定されるものである。挿図24の20~23は工具によって押し引した爪形状の文様を残すものである。また同図23は地文に縄文がられるものである。これ等はいずれも小破片で文様器見形の全体構成などは不明であるが、胎土及び文様の状態より炉畑第I群に類似するものである。同図24、25は細い粘土紐を貼りつけたもので炉畑第I群4類^{註4}に比定するものである。

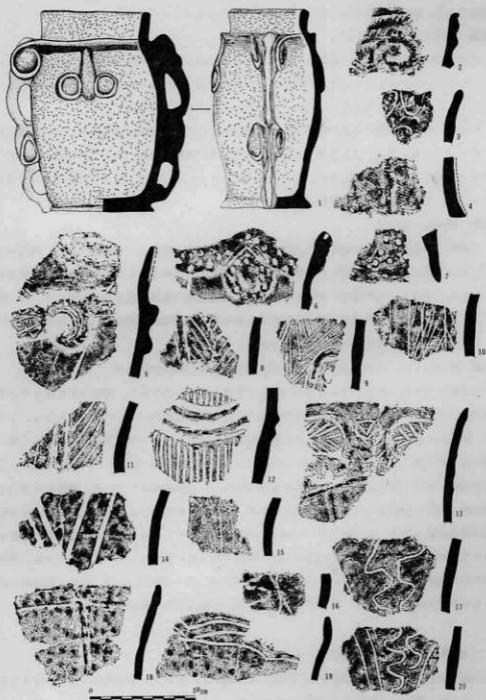
7類 (挿図25・26, 但し挿図25の1, 5, 6 挿図26の26を除く挿図27の1~3)

加曾利E式土器に比定される土器を一括して本類としたのである。沈線文を主体とする葉脈状の文様、また口縁部に隆帯による区画、などによって文様構成がなされているものなどである。挿図26の11, 13~17, 19~22, これは炉址附近より出土したもので、胴部に葉脈状の文様を有するものもある。この他にも挿図25の8~11, 13, 15, 18, 挿図26の4, 7, 8, 10, 挿図27の1, 3などが同類である。挿図25の2は口縁部に渦巻文を有し、沈線が施されている。胴部以下は他遺跡の例よりして葉脈文のあるものと推定される。その他に挿図27の2, 挿図26の1, 3, 5, 6など楕圓沈線文が見られる。また挿図26の3, 16, 17, 20は沈線文のみによるものであり時期的に前者とあまり差がない。挿図25の4, 7は台付土器の脚部の部で透し状になっているものである。挿図26の13の底部は無文であるがクルミの圧痕が見られる。また同図2, 12, 18, 24など網代底のあるものが知られる。同図27, 29などは無文である。なお同図28は葉脈痕が見られる。

後期 (挿図25の6, 挿図27の4~19)

口縁部が肥厚した部分に沈線および沈線による渦巻文、刺突文による列点文などを有するもの。またその部分から地文として縄文を施されているものなど後期に属するものを一括したのである。

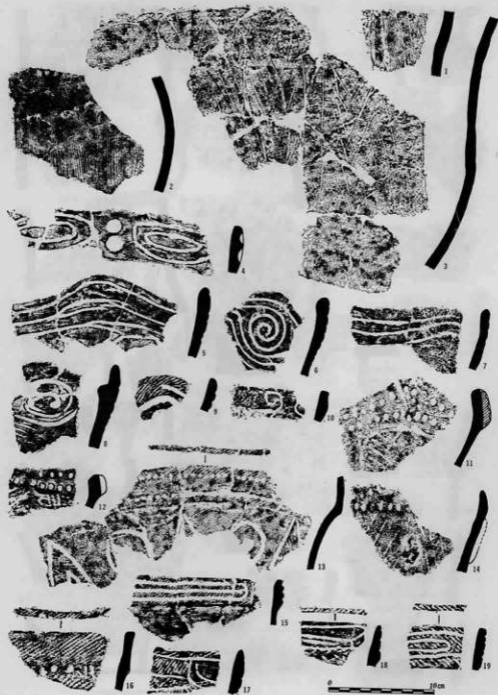
插图25 出土土器实测图及拓影



挿図26 出土土器実測図及び拓影



插图27 出土土器拓影



a 挿図27の11, 12は 緑帯が肥厚し その部分に列点文が施文され、それより下が縄文及び沈線文が施文されている。挿図27の11は葉脈状文が見られる。これらは中期の要素が残っているものである。また挿図25の6は列点を有する肥厚した緑帯でその下に櫛描沈線が見られる。

b 挿図27の4～10は口唇部は丸味を有し口縁部の肥厚する部分に渦巻文を有しているもの、また沈線文が見られるものであり、口縁部は平縁及び波状口縁をなすものがある。また中には縄文を口縁部に施しているものもある。色調は茶褐色で器厚は0.8cm～1.1cm前後である。

c 挿図27の13は口縁部直立するものでありその部分が緑帯をなし列点文上下にありその上部と下部のみ縄文が施文されている。また胴部に磨消縄文が見られる。扁平な口唇上にも縄文が施文されている。同図16もこれに類する。色調は茶褐色である。

d 挿図27の15, 17～19口縁部の肥厚する部分に縄文を施しその上に沈線による文様が見られるものである。色調は茶褐色であり、18, 19は口唇部に縄文が施文されている。

晩期に属する土器

a (挿図28の1, 2)

晩期の土器で少量出土しているが一括して本類とする。

A本刈谷貝塚第3群土器C類に分類されるもので、同図1は器面が粗雑で工具による波状沈線が見られるもの、同図2は肥厚する口縁部に竹管による波状沈線文が見られるものである。

b (挿図28の3, 6～11, 14～17, 20)

縄文晩期の精製土器の小破片が出土している。同図6, 7, 8はよく研磨された精製土器で皿形の器形をなすものである。同図14, 16, 17は浮線による立体的施文法によって網状文を有する土器で大洞A'に比定される碗型・深鉢型の器型の土器である。この他にも晩期の精製土器片の小破片が出土している。また同図20は土器の口縁部であり器面は磨かれていて黄褐色である。口唇部に沈線が押し引されている。

c 粗製土器 (挿図28の4, 5, 12, 19)

条痕文、無文の深鉢の器形をなす晩期後葉の破片が出土している。 (大江 上)

注1 岡壁忠彦・岡壁霞子「里木貝塚」倉敷考古館研究集報第7号 1971年

2 前提書

3 「考古学講座」先史文化 雄山閣149頁参照

4 大江傘「炉畑遺跡」各務原教育委員会 1973年

弥生式土器

弥生式の前・中期に属する土器は、遺跡全般より散漫とて少量出土しているので一括して述べることにする。

1 挿図29の1～13, 15～18, 21～26は条痕文系の土器いわゆる水神平式に比定されるもの

挿図28 出土土器実測図及び拓影



で、口縁部外縁に水神平式の特徴である大形瓦痕の見られる凸帯文をめぐらす菱形の土器片(挿図29の1~4, 10)と、壺の胴部と推定される櫛描波線文の見られる(同図15, 16, 18, 21~24)などが知られる。これ等の外にも条痕文系土器の破片が知られる。

2 挿図29の28は底部に布目瓦痕の見られ、体部は痕条文が見られる。その他貝田町式に比定されるものもある。この外に小破片であるが弥生式中期後葉の土器と推定されるものが少量出土している。挿図29の30, 37, 41は櫛状器具による直線文を主体としその下にヘラ描ものによる列点文が見られる文様構成を示すもので、同図30は全面に丹彩が施されている。また直線文を主体とし波状文、列点文円列文、が見られ、同図31, 33, 36は丹彩である。その他挿図29の35は櫛状文が見られ丹彩が知られる。同図34もあまり明瞭でないが櫛状文が施文されている。

3 弥生式後期の土器と推定されるものが、第1号住居址内の覆土及び床面以外は散漫として出土しているのでその組成等については不明である。この地方の弥生式土器の終末、土師式土器への推移について編年的な確立がなされつつある現状であり、今調査の出土状態などからして組成の上からも、個々の遺物についてその時期を知ることは困難であり、ここでは弥生式後期に属するものと推定されるものを一括して述べる。

広口壺形土器

a 挿図28の24は口縁部が「く」字状に外反しその先端がやや重れ気味で幅広い口縁をなしている。口縁部の端面に四条の凹線が引かれ、また口縁内面に竹管による列点文刺突文が斜めに施文されている。器面はヘラ磨きが行なわれているが口縁部の腐食が激しく文様がかすかに知られる程度である。挿図28の27は壺の胴下半部で屈曲する無花果形を示すものである。全面に彩色が施されている。挿図28の38は第1号住居址の床面上より出土したもので底部に近い部分の破片である大形壺の底部と推定されるものであり器面はよくヘラによって調整されている。

b 挿図30の4, 16は「く」字に外へ折れる簡単な口縁部のもので口縁が外反するもの、同図16は内反り気味のものである。同図4はヘラによって口縁内面が横に、外面が縦によく磨かれている。

c 挿図30の1~3, 6は全体の器形は不明であるが、口縁部は稜を有して屈曲し、斜めに上方に張り出す口唇を有し、その内外面に櫛状器具による刺突による羽状文を加えたものである。中でも同図3は頸部に角ばった凸帯をめぐらすもので、焼しまった埴輪質である。同図7は口縁部の稜および上端部をヘラで削ってその部分に櫛状器具による刺突文が施されている。

長頸壺

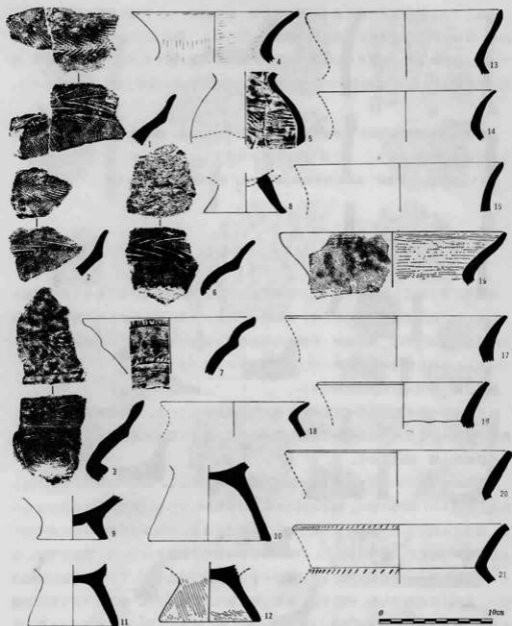
長頸壺の頸部の小破片が見られ、内外とも口縁にそって約巾1cmほどは横位にヘラ磨を施し以下頸部下端まで縦位にヘラ磨を施しているものがある

小形壺形土器

博圖29 出土土器拓影



挿図30 出土土器実測図及び拓影



挿図30の5は口縁部と胴下半部は欠失しているが、この部分より屈曲を示し彩色が見られる。ヘラによって器面が良く磨かれている。

壺形土器

小破片であり胴部以下不明であるが挿図30の20, 21などは「く」字形に外方に開く口縁部で21は口縁端に刻み目が頸部に工具により刺突文が見られる。挿図30の13~15, 17~19も小破片で、図上復元による。同図9~12の脚台であり、脚台の下端は折りまげのないものであり、器厚は比較的あつい。なお、刷毛目のついていないものが多い。その壺形土器の破片が見られる。

高杯

高杯は杯部が深く、内曲りぎみの円錐形の有窓脚部をつける。器面はヘラによって縦位に磨かれている(挿図32の4, 8)。8は第一住居址内より出土したものである。

注1 神村通「北原遺跡」高森町教育委員会昭和47年、北原式土器に類似される。

土師式土器

美濃地方の土師式土器の研究は今まで発掘調査された絶対数が少ないのであまり研究が進んでいないが、近年隣接の愛知県などで、土師器の様相が、次第に明らかにされて来ていると共に、最近美濃地方では、南野遺跡・牧野小山遺跡などで調査が行なわれ、その成果が報ぜられている。これ等を参考にし当遺跡の出土土師器について述べることにする。

壺形土器(挿図31の8, 図版19の5)

二重口縁部に稜を有し、その内外共に丁寧に篋磨きがされている。また胴部は球形をなし、横位に篋磨きがなされ、赤色塗料の付着が認められる。胎土は密で黄褐色である。^{注1}

広口壺形土器(挿図31の1, 3, 5, 9)

口辺部は「く」字状に開く、無文の土器で、胴部は球形をなし、器面には刷毛目調整が見られる。同図1は口縁部は横に、胴部は斜めに刷毛目調整が行なわれ、頸部内面に指痕が見られる。底部は丸底である。焼成はよく胎土は密で茶褐色である。同図3は口縁部は縦に刷毛目により調整が行なわれ、胴部は斜めに、口縁内面は横に刷毛目調整されている。底部は平底になっている。同図5は前者とは異なった口縁端を示し、口縁で内反を示している。器面は磨耗が強い。色調は黄褐色である。同図9は口縁部は縦に刷毛目調整がされ、胴部は下ぶくれの形態を示し、横及び斜めに刷毛目調整され、口縁内面は横に調整されている。底部はやや凹み気味に上っている。1, 3, 9は表面に煤が付着し壺形土器と機能上区別がつけ難いものがある。1のみは荒新切の時期のものである。

埴形土器

この類の形態も多様である。aはいわゆる「小形丸底土器」の範疇に含まれるもの。(挿図

插图31 出土土器实测图

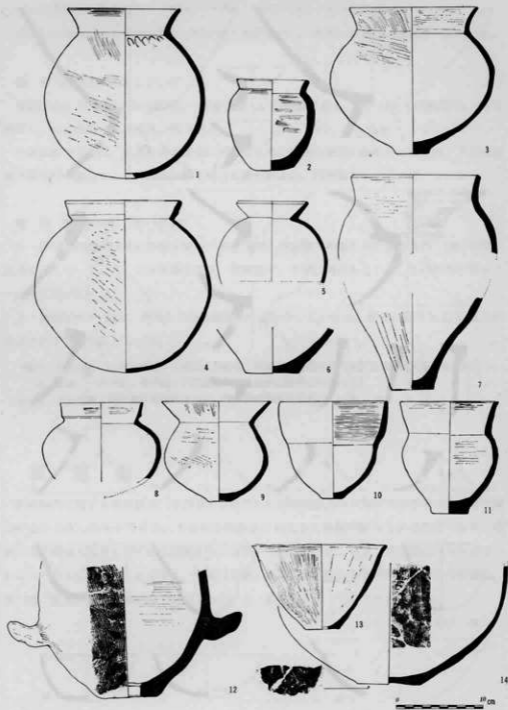
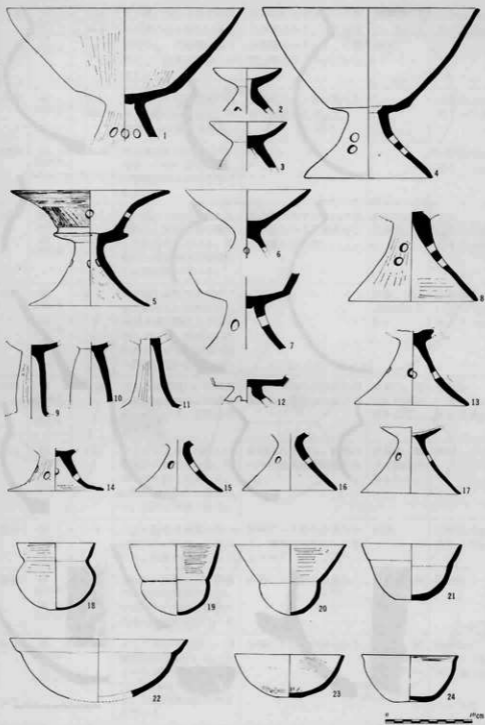


插图32 出土土器实测图



32の18～20、図版19の1、2)で、挿図32の18は口縁部は退化した二重口縁のもので器面は筧によって横ナデに磨かれている。19、20は口縁部が大きく開き体部に比較して口縁部が長く器面は磨かれている。

台付甕形土器 (挿図33の1～11、挿図34の1～5、9～13、19～23)

口縁部がS字状に屈曲する。有段口縁をなす、胴部の上半部が球形をなし下半部が細まって脚台を有する甕形土器である。口縁部の立上がきついのと、ゆるく開くものとの二種類がある。前者は胴上部の張りが少なく、後者は胴上部が横に大きく張出す。また口縁部に櫛状の刺突文が見られるものが二例知られた(挿図34の2,9)。器面全体に単方向また「く」字状に櫛状工具によって条痕が施され、また肩部および胴部に数本の櫛描き平行線文が施されているものが普通である。器面に煤が付着している。また脚台の下端が内側に折りまげられているものが大部で、挿図34の11,12は折りまげは見られないが、胎土器厚よりS字口縁に伴うものと推定される。胎土に砂粒を含み、器厚は薄い。

杯形土器

(挿図32の22) 丸底の体部に口径が大きく開き、直斜状に開く口縁が付すもので、器面は内外共に筧によってよく磨かれている。同図21,24はこの杯形形態に近いものである。

椀形土器 (挿図32の23)

器体が丸いもので体部は内外面を筧で磨いている。内面の底部に近い部分は筧で削って成形された痕が見られる。

甕形土器A (挿図31の4・挿図34の7,25)

口縁部がわずかに肥厚する筧で体部は球形を呈し、底部は丸底で、器面は刷毛目を施し、器面に煤が付着している。これ等は、比較的S字口縁に近い関係が考えられる。

甕形土器B (挿図35)

頸部が強く「く」の字状に折れるものは、胴部の肩が張って、胴長の器形をなすものである。(挿図35の1,2,4,挿図34の26) また頸部が前者ほど強く折れないもの、その角度は約15°程の差があるものは(挿図35の3,6,7,挿図34の8,14) 胴部は肩の張らないゆるやかな線を示す器形であり、挿図35の7の示すように底部はやや凹をなすものである。器面は櫛状工具による整形擦痕が口縁部は全て横なでで、胴部は縦に施されている。内面はかすかに擦痕が残る、挿図35の6,7,8,挿図34の15以外は、横なでが普通である。挿図35の7の色調は赤褐色で、それ以外は茶褐色、黄褐色である。これら土器の出土地点は住居址の処で前述したので略す。

甕形土器 (挿図31の12,13)

同図12は第4号住居址の床面上より出土したものであり、口縁部は欠失しているが、胴部に

图33 出土陶器

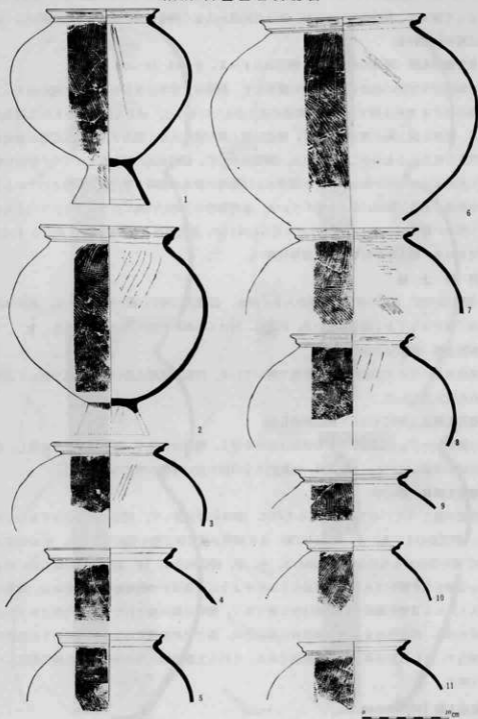


插图34 出土土器实测图

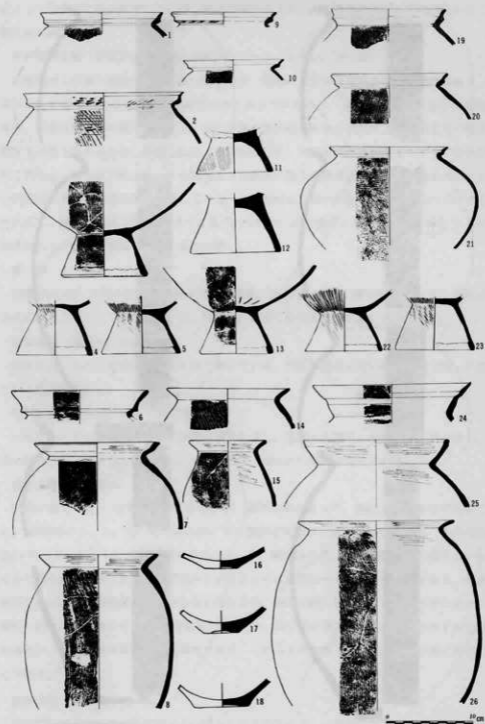
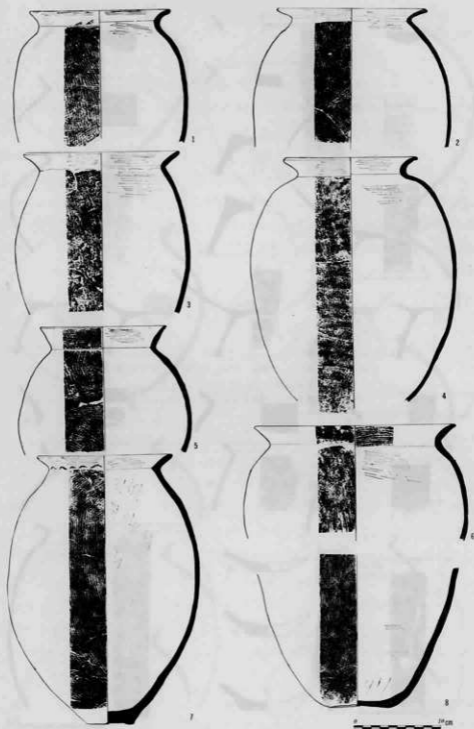


圖 35 出土器展圖



左右対照的に把手が付いている。深鉢形を呈するものと推定される。底部はやや凹みぎみの平底で、一孔が穿たれている。

同図13は比較的小形の甗でラッパ状に開く器形を示し、底部は平底で一孔が穿たれている。

器台 (挿図32の2, 3, 5, 15, 16)

挿図32の2, 3の器台は共に脚部の一部を欠損し、円窓脚である。15, 16とも円窓脚で、15は外反し、16は内弯する円錐形の脚である。

5は高杯で言えば、杯部に当る部分に円窓をもち、口縁は横位に刷毛目が施され、下部は縦位に刷毛目を施している。脚部に移る部分に稜が見られ、円窓脚でハの字に開いている。

高杯 (挿図32の6, 7, 9~12, 14)

a 挿図32の7, 12は共に杯部・脚の一部を欠損し有窓脚で杯部に共に稜をもつ。12は杯部の底は平たくなっている。14は杯部を欠き、有窓脚で、下部は外反している。6は杯部がぎゃくハの字に開いている。

b 挿図32の9~11は、杯部ならびに脚部の一部を欠いているが、細長い脚で9, 11に見られるように下部は外反している。

注1 杉原荘介、大塚初重編「土師式土器集成」本編1 甲斐忠彦「大境洞窟遺跡出土器」に類似する。

2 新編「一宮市史」資料編2 下渡遺跡出土土器中に類例が知られる。

3 吉田英敏「南野遺跡発掘調査報告」美濃加茂市教育委員会 1976

須 惠 器

古墳時代に属する須惠器は、3号墳より出土した長頸甗以外は大部分が方形墳丘基底部の濠の中より出土したものである。その他の地点より出土した実測可能なものは数点である。それらは住居址と関連を示す出土状態のものは検出されなかった。従って3号墳以外のものは、ここで一括して述べることにする。器種は杯蓋、杯身、無蓋高杯、有蓋高杯、甗、台付有蓋甗、直口甗、提甗、横甗、器台などが出土している。以下表によって表すことにする。

(大江 命)

器形	挿図及び 図版番号	出土地点	形態の特徴	手法の特徴	色調質	備考
杯蓋	挿 36の1 図 20の9	H14 H14	天井部上面は平坦で体部との境に稜を有し、体部は内反し、口縁部は鋭く外反し、内面に面取りが見られる。	天井部にわずかにヘラ削りが見られる、よく器面が調整されている、口唇部は薄くつくられている。	灰黄色であり、胎土は精良。	口径14.8cm 高さ 4.3cm
杯蓋	挿 36の2	H11 H28	天井部の上面は平坦で体部との境に稜を有し、口縁部はほぼ垂直である。	天井部にヘラ削りが見られよく調整されている。		口径15.1cm 高さ 4.6cm
杯蓋	挿 36の3	K9, 8	天井部の上面が平坦で、体部との境に稜を有し、口縁部がやや外反気味である。			口径13.6cm 高さ 4cm
杯蓋	挿 36の4 図 20の6	K10	天井部よりゆるやかな丸味持ち、体部と境の稜の上で凹を有している。体部は丸味を帯び口縁部はやや外に開いている。	天井部でわずかにヘラ削りが見られる。器面をよく調整している。	暗褐色、胎土精良。	完形 口径14.4cm 高さ 5.2cm
杯蓋	挿 36の5 図 20の6	K 8	天井部上面がやや平坦であるがゆるい丸味を示し、体部と境の稜の上で凹を有している。体部は丸味を持ちながら口縁部は鋭く外反している。		灰色、胎土に細砂を含む。	完形に近く 口径14.7cm 高さ 5.3cm
杯身	挿 36の6 図 20の6	D13	立上りが内傾し、口唇部に面取りがある。受部は横に出ている。底部は平坦である。	体部ヘラ削りが見られ底部はよく成形されている。	灰黒色、胎土に雲母が見られる。	完形品 口径13.6cm 高さ 5.5cm
杯身	挿 36の7 図 20の13	L11	立上りが大きく内傾し口縁部が外反している。受部は横に長く出ている。口唇部に面取りが見られる。底部は平坦である。	体部はヘラ削り、底部にヘラによる成形が見られる。	灰黒色、胎土に雲母が見られる。	90%
杯身	挿 36の8 図 20の4	J 9	立上りはほぼ垂直に近い、口唇内面が面取りされている。底部は水平である。	体部にヘラ削りが見られる。底部は水平にヘラ削りされている。	灰色。	口径12.9cm 高さ 4.9cm
杯身	挿 36の9 図 20の12	G14 I 15	立上りが内傾し、口縁部でやや外反気味である。受部の下の体部に明顯に凹ませて段をなしている。	体部はヘラ削りである。	灰褐色、胎土精良。	約50%
杯身	挿 36の10 図 20の14	K 8	立上りがやや内傾し、口縁部は外反している。立上りの部分の器厚が薄い。受部は横に出ている。口縁内部面取りがされている。	体部ヘラ削りが見られる。	灰白色、胎土に雲母が混入している。	約60% 口径12.1cm 高さ 5.4cm

杯身	挿 36の11 図 20の3	D12	立上りがやや内傾しながら口縁部は外反している。受部はやや斜め横に出ている。口縁内部は面取りされている。	体部へラ削りが見られる。底部はへらによって水平に成形されている。		口径12.1cm 高さ 5.1cm
杯身	挿 36の12 図 20の5	I 5 第16号 住居址	立上りは内傾しながら口縁部で外反している。口縁内面は内反り気味の面取りがなされている。受部は斜めに出ている。体部に1条の凹がめぐらされている。底部はやや平坦である。	体部にへラ削りが見られ、器面はていねいに成形されている。	灰黒色、胎土は精良。	完形品 口径12.7cm 高さ 5cm
杯身	挿 36の13 図 20の8	D 9	立上りはそり気味に内傾している。受部は横に出ている。体部は深い。		灰白色、胎土は精良。	口径11.5cm 高さ 5.9cm
杯身	挿 36の14	K 8	破片であり、全形を知ることは出来ない。体部にへらによる沈線引かかれている。		灰色、胎土は細砂混りて胎土は粗悪である。	
高杯	挿 36の15 図 21の2	B 6	無蓋高杯、口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめ、外反する部分に稜が見られその上がやや凹んでいる。つまみの剝落した痕が見られる。脚部には長方形の4方通しがある。	口縁部の外反する部分に6条の波状文がめぐらされている。また脚部と杯部のつなぎの處に数条の沈線が引かれ、脚部の接合を強化したものと考えられる。杯部及び脚部はへらによって成形されている。	鼠色、瓦質である。	45% 口径13.5cm 高さ10.4cm
高杯	挿 36の16 図 20の15	J 12 F 7 K 8	破片であるが、無蓋高杯と推定される。口縁部がゆるく外に開き、受部の様な稜を有し、その下に7条のこまかい波状文が施され、杯部に2段の段が見られる。		黄灰色、胎土はソフトな砂目の粘土が使用されている。	口径19.3cm
高杯	挿 36の17 図 20の11		脚部を欠いているが無蓋高杯と推定される。杯部に稜を有しその部分より口縁部にやや外反しながら開いている。		灰白色、胎土は砂まじりでありあまり良くない。	口径 16cm
高杯	挿 36の21 図 21の3	E6, 7	有蓋高杯、立上りは内傾しながら縁部がやや外反を示すもので、脚部はラッパ状に開いて、端部わずかに弧をえがいている。脚部に3個孔を穿って透しとしている。	杯部はへら削りであり、脚部はロクロ目が見られる。	黒鼠色、胎土はややわらかい。	口径10.8cm 高さ 9.4cm

高杯	挿 36の19 図 21の6	E6, 7	有蓋高杯, 立上りの部分 は外反ぎみに内傾してい る。口唇部はかすかに凹 が見られる。受部は横に のびている。杯部は丸味 を有している。脚部は八 字状に開き脚裾やや広が っている。端面面取りさ れている。	杯部はヘラ削り, 脚部は 良く調整されている。	濃灰色, 有 機物の黒色 の斑点が見 られる。	口径10.7cm 高さ 9cm
高杯	挿 36の20 図 21の4	B7-19	有蓋高杯, 立上りの部分 はやや垂直に近く, 口唇 部は水平で凹がみられる。 受部は横に出ている。脚 部は八字に開き脚裾の部 分広がって端面が面取さ れている。	杯部はヘラ削り, 脚部は 良く調整されている。	黄灰色, 胎 土中に雲母 が見られ る。精良で ある。	口径11.9cm 高さ 9.5cm
高杯	挿 36の22 図 21の5	B6	有蓋高杯, 立上の部分が 内傾しながら外反してい る。口唇部は丸くおさま り, 脚部は八字に開き, 脚 裾の部分で広がり, 丸味を 持った端部となっている。	杯部はヘラ削りであり, 脚部はロクロ目が見られ る。	黒鼠色, 胎 土はややや わらかい。	口径11.7cm 高さ 11cm
高杯	挿 36の18 図 20の10	B6, 7	有蓋高杯部の脚部を欠し ている。立上の部分が内 傾, やや垂直に立上って いる。口唇はわずかに内 傾し凹が見られる。	杯部はヘラ削りである。	灰褐色であ る。胎土は 精良。	口径10.9cm
高杯	挿 36の23 図 20の18		有蓋高杯の脚部で脚裾部 で鋭く開いて端部でかす かな返りが見られる。	脚部と杯部のツナギの部 分にヨリ土が見られず, 明瞭にツナギの部分が見 られる。	白灰色, 胎 土はあまり 良質でない。	
高杯	挿 36の24		有蓋高杯の脚部の破片で ある。裾部で開き端部が やや上反ぎみになっている。 脚部に穴が穿たれて いるが破片である。3穴 か4穴か不明である。	脚部に横にヘラで浅い沈 線が付けられている。	灰褐色, 胎 土は精良。	
壺	挿 37の2 図 22の6	E10	扁球形の体部に長くのび る口頸部がつく。口頸部 は2条の沈線によって3 分され, その区画内に波 状文が施文されている。 口縁部に稜が見られる。 体部に3条の沈線が引か れ, その区画内にクシに よる刺突文が施文されて いる。また1孔が上部の 区画部を中心に穿たれて いる。	体部下半はヘラ削りして いる。	鼠色, 胎土 精良。	口径11.5cm

施	挿 37の3 図 23の7	E13 D12	破片であるが体部より上の器形は知る事が出来る。口縁部開き頸部と体部の境はあまりくぼんでいない。口縁部に稜を有し頸部に波状文を一面に施文されている。体部は沈線、間にクシ目文が刺突されている。		黄灰色である。胎土中	口径12.2cm
施	挿 37の8 図 22の5	H11.53 住居址 覆土	扁形状の体部長くのびる口頸部がつく、口縁部に3条。頸部上部に2条の体部の肩がはり、体部に孔があり、その上に2条の沈線がまた下部にも2条の沈線がめぐらしている。口頸部の沈線間にヘラによる羽状また斜状の文様が見られる。体部上下の線間、その上に沈線をはさんで羽状を示すように文様が施されている。	体部の下部はヘラ削りが見られる。	黄灰色、胎土に細砂が含まれている。	口径10.7cm
施	挿 37の11 37の12 37の16 図 23の6 23の4 23の5	K12-17 K8-55 D12	いずれも破片であり、K12は体部に上下に2条の沈線がめぐらし、そのヘラによる沈線が見られる。K8は体部にクシによる刺突文がある。D12は体部の肩の直下にクシによる刺突文が見られる。	K12体部底部はヘラ削り、よく調整。	K12黄灰色胎土精良、K8灰色胎土中に細砂を含む、D12黄灰色、胎土精良。	
台付 短頸 壺	挿 37の7 図 21の1	D12 D13	扁形状の体部に垂直に立上る口縁部で、脚部は3条の沈線で区画された。上段は左下段右に傾斜した刺突文が施されている。脚部は1段3方透を有し裾部に沈線がめぐらしその部分より広く開いている。	透はヘラによって三角形にあげられている。	ネズミ色。	口径 6.4cm 高さ 15cm 自然釉がかかっている。
蓋	挿 37の9	K8-10	凹んだツマミを有し天井部との境に浅い段を有する。内部口唇部を面取りしている。			口径 9cm 高さ 4.4cm 台付短頸壺の蓋と考えられる。
脚部	挿 37の1	H7	破片であるが2段3方透である。上段は不明であるが、下段は波状文が全面に見られ、裾部に稜がめぐらされ、端部は面取りされている。	脚部の内面にヘラ削りの痕が見られる。	黄灰色、胎土に細砂を含み吸水性に富んでいる。	無蓋高杯の脚部か器台かいずれかである。

脚部	挿 37の14 図 24の2	K14	破片であり、2段3方透である。上段と下段の境に2条の沈線が引かれている。		黄灰色、胎土精良。	自然釉、高杯の脚部と推定される。
蓋	挿 37の13 図 24の1	I6	破片であり、器形は復元出来ないが凹んだツマミを有する。	ヘラ削り痕が見られる。	黄灰色、胎土砂を含む。	有蓋高杯の蓋。
高杯	挿 37の10 図 20の17	F10	破片であるが、脚部に長方形の2段の3方透を有す。		黄灰色、胎土内に黒色の點滴が点々と見られる。	無蓋高杯の脚部と推定される。
壺	挿 37の5 図 24の3左	A8, 9	中形壺の破片であり、口脛部に2条の襷を有し、その上下に波状文が施文されている。	内面は非常によく磨かれている。	表面灰色である。内面の体部は黒色を帯びている。胎土は精良。	
壺	挿 37の4 図 24の3右	E11 E14 E11	中形広口壺の破片であり口縁に襷をめぐらされ、その下に沈線が引かれている。口脛部は波状文が施文されている。		黒色で光沢を示している。胎土は砂が含まれている。	
壺	挿 37の6 図 22の4	E10	口脛部に2条の沈線が2段に引かれ2区画に分けられ波状文が施文されている。口脛部凹をなしている。体部の肩部に4条の沈線が引かれ、上段に波状文、中段、下段はクシ目による刺突文が施文されている。		淡黄色であり細砂が多く含まれている。ソフトな感触の土器である。	口径14.5cm
広口壺	挿 38の1 図 22の7	F7 E8	胴部の張った底部のやや尖った扁球形の体部に口縁部が外反する。口縁に沿って段を有し、口脛部内外するように面取りされている。体部には右傾する叩き文が全面に見られる大形壺。	内面は整形されている。	灰色であるが自然釉の部分は青色を呈している。	口径22.7cm 高さ 47cm 自然釉
壺	挿 37の20 図 24の4 24の5	I3 I4 G13	大形壺の破片で口脛部に波状文を有し、体部は叩文が見られる。	内面は調整されている。	黄灰色、口脛部黒色きみである。胎土は砂混りである。	
壺	挿 37の17 図 24の6上	F9 F8	大形壺の口縁部であり、3条の沈線が引かれ、3つに区画された上の2段	内面はロクロ目が見られる。	灰白色、胎土わずかに砂を含んで	

			に刺突文が見られる。口唇部がわずかに折返しが見られる。		いる。	
壺	挿 37の18 図 24の6上	F 8 F 11 D 8	大形壺の口縁部である。口縁に沿って1条の沈線が引かれまた2条沈線が2カ所引きめぐられ、3区画に分けられ上の2区画に刺突文が見られる。口縁に沿った1条の沈線の所でかすかな段を有し口唇部を示している。	内面はていねいによく調整されている。	黒褐色で胎土に砂を含んでいる。	
壺	挿 37の19 図 24の6下	I 7	大形壺の口片部の破片で2条の沈線がめぐられ、口縁部を3区画して上2区画に波状文が施文されている。	内面はよく調整されている。	黒褐色、胎土精良。	
瓶	挿 39の5 図 23の2	I 5	口縁部が短かく外反し、口縁部は稜を有している。体部には斜目にカキ目が施文され1条の沈線がめぐらされている。その位置に把手が見られる。口縁部の1方が片口になっている。底部を欠くので不明だが瓶と推定される。		鼠色。	
提瓶	挿 38の4.5 図 22の1	F 10	口縁に沿って段を有しその部分より外反が強く、また口縁部に二条の沈線が引かれ、沈線の上下に波状文が見られる。体部は球形であり、背面は扁平に近い。肩部に三個の三日月状の耳が付けられ表面は隋円状で背面は扁平に近い。	内面頸部に口縁部と体部が接合されている。内外面とも非常によく調整されている。	色調は黒褐色である。	口径 9.4cm 高さ29.4cm
提瓶	挿 38の2 図 24の7	J 9	破片であるが球形の体部に左右に耳が付けられた痕がある。沈線が見られる。		表面ネズミ色で内部紫褐色を示す	
横瓶	挿 38の3 図 22の3	E 11 F 8 K 18 K 11 L 11	俵状の体部に一条の段を有し外反する口縁部が付けられている。	口縁部と体部は頸部接合され、体部は一方でふさがれている。体部の器面は櫛状工具に縦横に引き調整されている。	色調灰黄色	口径 11cm 高さ 28cm
細頸瓶	挿 21の6 図 22の2	第2号 古 墳	フラスコ型の器を示している口縁部に稜が見られる。	器面にロクロ目が見られる。	灰黒色	口径 8.5cm 高さ20.9cm

插图36 出土土器实例图

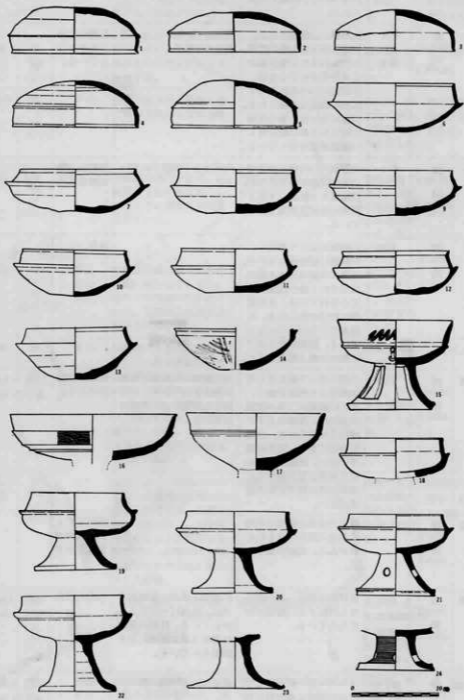


插图37 出土土器实例图

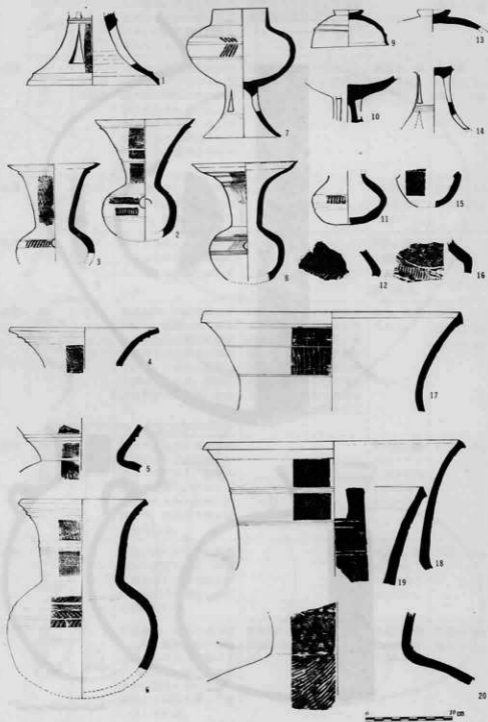
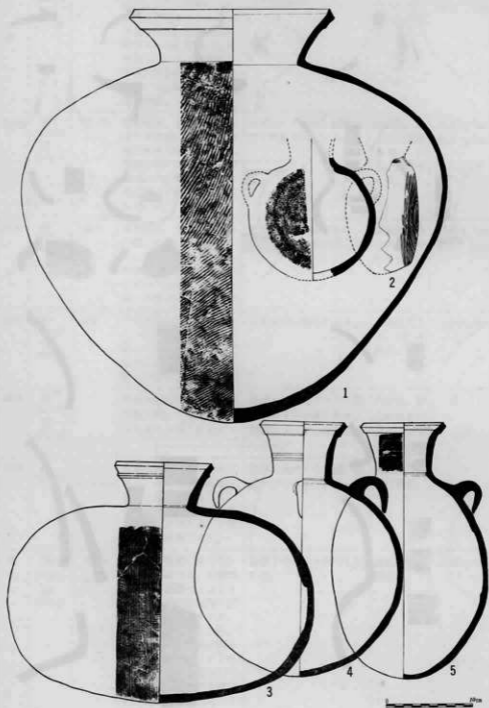


插图38 出土土器实测图



歴史時代の遺物

古墳時代以外の須恵器、灰軸陶器、中世陶器は山茶碗を始め、少量であるがその他の陶器が出土している。

須恵器（挿図39の1～4，6～16）

全て破片であって実測に耐えるものが少なく、杯蓋，杯，盤，甕などが出土している。同図6～9は杯蓋で，扁平または中央がやや高くなった鈕をつける。同図11～16は杯であり高台付のもと寛で底部を削っているものがある。同図10は盤であり美濃須衛古窯址群に見られるものである。同図1～3は甕の一部であり，叩文など見られる。また同4は把手付の短頸壺と推定される。この他に図版25の7の小形で深みのある坏はG13から出土し，口径8.2cm，高さ6.2cmである。

灰軸陶器（挿図40・1～8，図版27の1）

碗・丸皿・段皿が出土している。碗以外は，推定によってその器形を知った。碗は，小振りで，やや浅く，高台端はやや丸味をもち，灰軸もつけがけがしてある。他に小破片であるが，緑軸陶器が出土している。

山茶碗（挿図40・9～48，図版26）

山茶碗は，調査地域の全域から出土しているが，その分布にはかなり偏在があり，G6・H6の9周辺が約24%を占めているが，特にそのことと関連ある遺構は認められなかった。

種別では，碗・片口大鉢・丸皿などが出土している。挿図40の47片口大鉢は，L9の土壕中で伏せられた状態で出土した。胎土は珪石粒が見られ砂質でザラとしている。使用によって磨耗している。

碗は，大体三つのタイプに分けられる。第1のタイプは，付高台断面が台形状となつて，胴部が丸味をもち，厚手に成形されているもの。第2のタイプは，胴部が逆「八」の字形に開き付高台断面が三角形で高台がやや大きなもの。第3のタイプは，総体に薄づくりで，付高台も貧弱で径も小さい。これらを美濃古窯の編年^{註1}にあてはめると，第1のタイプが第2型式，第2のタイプが第4型式，第3のタイプが第5型式にあたると思われる。

挿図40の15はJ 13gから出土したが、図版26の8. 17に知られるように外側の三隅に石などが当てられ、それ以外は黒ずんでおり、内面底部に黒い点々が付着していた。これは碗を火にかけている。

丸皿は、高台がなく糸切底のままで、内面底部に指圧痕がある。挿図40の30は、外面底部に墨書記号がつけられ灯明に使用されたのか内外とも黒ずんでいた。挿図40の36はI 10gの集石遺構の石が積まれた内から出土している。

挿図40の10. 11はL 9gの土壌中より前述の片口大鉢とともに出土したが、碗は口を合わせられた状態で出土した。

それに、甕が2個体以上出土しているが、うち1個は、胴部以下の小破片が数点出土したが胎土、焼成具合から考え近くの兼山町古城山古窯出土の甕と類似している。挿図40の51は、その口づくりからみてもう少し時代が下るものかも知れないが、押印文様や叩文様は見られなかった。

その他に、碗の内部に放射状に交叉刻線を入れたオロシ碗片が1個出土しているし、陶丸が1個出土している。

それに、水注ぎ、把手(挿図40の49. 50)など室町末期と思われる破片が出土しているし、また、その他の陶片も若干出土している。

注1 田口昭二「美濃古窯の灰釉陶器と山茶碗の編年」昭和48・2精華小

2 兼山町「兼山町史」

土 製 品

土器以外の土製品には、土偶、土錘などが出土している。

土偶 (挿図43の19, 図版33の2)

L 13, 14のセクションから出土しているが、胴部の一部が残されているのみで、乳房が作り出されて、手部は突起状にしてあるのみである。

土錘 (挿図43の18. 20~24. 26~30図版33の2)

破片も含めて22点出土しているが、ほぼ全域より出土している。形態的に3種に分類ができ、長さ5cm~7cm、径1.5cm~2cm、重さが5g~8gほどの細長い型が8個、長さ3cm~4cm、径2.5cm~3cm、重さ5g~8gほどの丸型が10個、白型が4個とに分けられる。白形の一つは、長さ3.7cm、径4.2cmでやや大型で、重さ20gであった。

棒状両孔式土錘 (挿図43の25, 図版33の2)

長さ7.5cm、径2.8cmで、0.5cmほどの孔が2つあけられている。他に1個、類似品と思われる

插图39 出土土器实例四

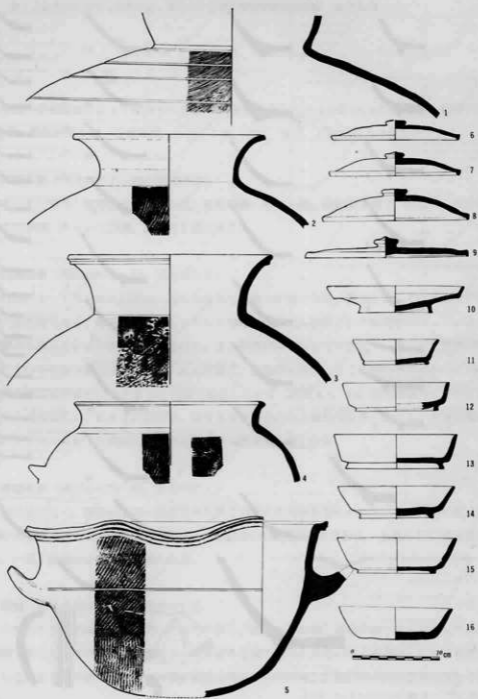
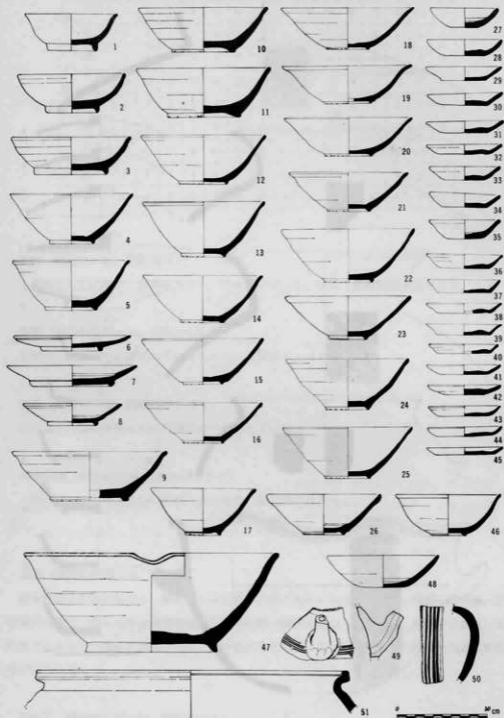


插图40 出土土器实测图



るのが出土しているが、頂部に凹みがつけられている。^{註1}

注1「和歌山における古墳文化」関西大学文学部考古学研究室紀要 153頁参照

石 器

今回の発掘調査によって出土した石器は、破片を含めてではあるが、石鏃51個、打製石斧547個、磨製石斧9個、石錘75個、石包丁3個、勾玉、管玉、石製模造品9個などである。

打製石鏃（挿図41の1～26、図版28の1）

すべて打製で、型態的に分類すれば、無茎40個、有茎8個、柳葉型3個で、石質は、黒雲母安山岩27個、チャート21個、黒曜石3個である。

打製石斧（挿図42の1～14、図版28の2）

打割によって作られた石斧は、破片も含めて総数547個で今回の調査によって出土した石器中一番多量である。緑泥片岩やホルンヘルスなどの円礫から打割されて短冊型に作っている。原表面を残しているのが若干観察された。また挿図42の5のように巾広く、厚いが上部が切断されているのが2個出土している。出土状態は、全地点に及び、とくに第19号住居址内に完形土器の附近に床面につきさった状態で出土している（図版4）。また同住居址内の炉の附近より三点出土した。E9g、D10g、D8gなどを中心の方墳地内に多く出土し、方墳が縄文期の生活面、又封土に周囲の土を利用している関係かと思われる。

磨製石斧（挿図41の32～35、図版29の1）

完形品はなく、挿図41の33～35は定角石斧で刃部に使用痕が認められる。巾2cm弱の蛇文岩製の小型のものの破片が出土している。同図32は乳棒状石斧片であり、全面に拓打痕が見られ、一部に使用による磨耗が見られる。

石錘（挿図41の37～49、図版30の1.2）

川原石の長軸の両端を打ち欠いたものが多く、82.4%の62個、両端に振り込みを施したのが13個であった。その重量を種別によって分けると表のようになる。出土地点は、D9gを第一としそれより西の地点で半数の31個が出土している。これは、打製石斧の出土状態と同じである。

石錘類別重量表 (完形品のみ)

類	グラム	3	5	7	8	10	11	12	13	15	16	18	19	20	22	23
	打	0	1	1	1	0	1	1	2	2	1	1	3	2	1	1
	擦	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
類	グラム	24	28	29	30	31	33	35	37	38	39	40	41	42	47	49
	打	1	1	5	1	2	2	3	1	1	1	2	1	1	1	2
	擦	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0
類	グラム	50	51	57	59	60	70	81	92	100	102	109	110	151	169	
	打	1	1	1	1	0	2	1	2	1	1	1	1	1	1	
	擦	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

石錘 (挿図41の36, 図版28の1)

1個出土しているが、頭部が大きく、平になっている。石質は黒雲母安山岩である。

搔器 (挿図41の27~31, 図版29の3,4)

不定形スクレパーと呼ばれているもので、石質はチャートである。

凹石 (挿図42の27, 図版29の2の1)

花崗岩の円礫の片面にだけ打痕凹がつけられている。

棒状石器 (挿図42の26 図版29の2の3)

1個出土している。これは緑泥片岩であり、拓打痕が見られる。
ある。

砥石 (挿図42の15~21, 図版31)

凝灰岩製の小形のもの、凝灰岩・砂岩製の大形のものに分けられる。挿図42の16は、輝緑凝灰岩製で一面に小形金属器を研磨したのか細い線が何本か入っている。挿図42の15は、砂岩製ではあるが一端に穴があけられ一面は弧状をなしている。大形のものに片面か両面に磨耗痕が見られる。

石包丁 (挿図42の22~24, 図版32の1)

破片も含めて3個出土しているが、完成品の2個は、弥生時代の第1号住居地の壁から出土し、2個とも粘板岩製で、刃部は両面より研磨されている。また使用によってか刃部の中央部が湾曲している。

管玉・勾玉 (挿図43の7, 8 図版32の2)

いずれも硬玉製で、方墳の近くのグリットから出土している。これは方墳と関係のあるものと考えられる。

滑石製模造品

有孔円板は破片を含めて9個出土している。そのうちの5個は方墳の近くから出土している。いずれも滑石製で粗製である。平たい円板に2孔を穿ったものが6個、長軸4.5cm・短軸3cmほどの細長いのに両端に小穴を穿たれたものと長さ5cmほどで不整形で1孔を穿ったものなどが出土している。(挿図43の9~17, 図版32の3)

また滑石製の白玉が6個出土している。(挿図43の1~6)

その他の石器

挿図42の25に見られるように先端のみ研磨している。また挿図42の26は棒状で磨かれているが、破片のため形状は不明である。(中島勝国)

鉄 器

挿図20の8はH9gの土壌の覆土中より出土した。その他から少量出土しているが断片であり、また錆化が著しいので判別は不可能である。(中島勝国)

自然遺物

木炭片がG11, I14, などの地点で採集されたが、特に注目すべきは第1号住居地の床面上に見られ、あたかも家屋の建築物の一部であったと推定される。その他、土師式の各々カマともなう住居地のカマ附近に木炭化した小破片がわずか見られた。(可児鋼平)

插图41 出土石器类图

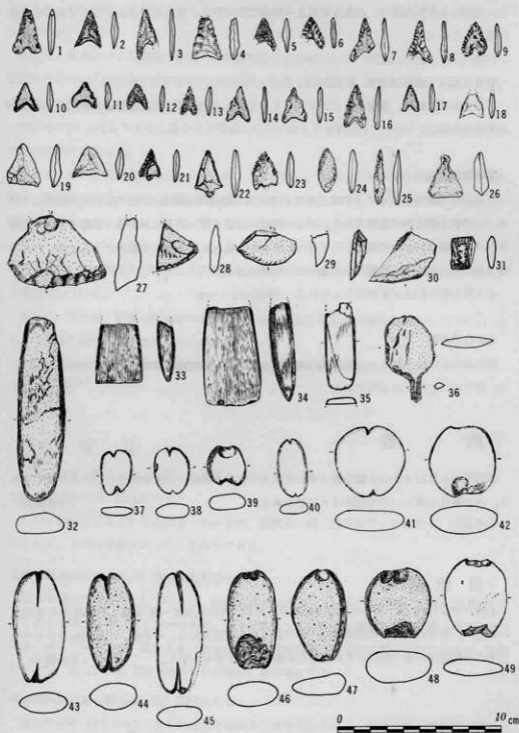
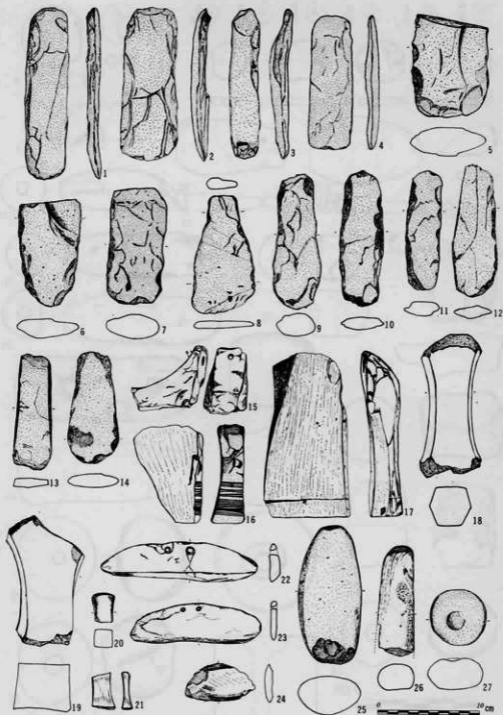
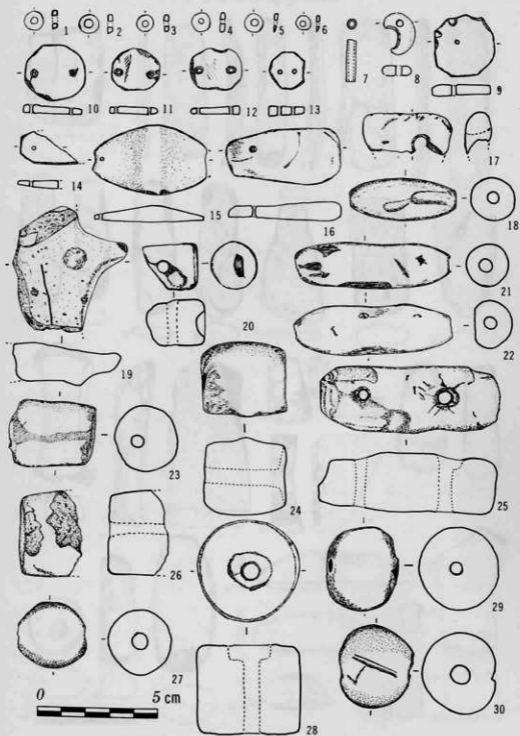


插图42 出土石器实例图



挿圖43 出土石器及び土製品実測圖



ま　と　め

今回の宮之脇遺跡の発掘調査によって、縄文時代・弥生時代・古墳時代・歴史時代に互る遺構、遺物などの多くの資料を得たのである。遺物の出土状態も複合遺跡の關係上良好とは言い難い状態であり、一部を除いてはセットとして把握することが出来なかった。しかし、この地方の考古学研究の上では欠くことの出来ない貴重な資料が見られ、それ等について考察する。

先ず地形的に見ると、木曾川と飛騨川の合流点であり、各時代それぞれの立場より経済的、文化的にも重要な地であり、それを示すようにこの木曾川沿いの左岸の低位段丘面には、本遺跡をはじめ川合遺跡、徳野遺跡、北裏遺跡などが立地している。また、対岸の美濃加茂市地域にも牧野小山遺跡が知られている。また、本遺跡の木曾川に面した段丘崖の中程に知られる湧水は、生活に欠くことの出来ない飲料水として使用されたと推察される。上記の各遺跡の近くに湧水が所在する点、遺跡の選定に湧水が大きなき要因となっている。

地質的に遺構は、黄色シルト質砂層を基盤として成立している。

住居址は縄文時代より古墳時代に互る19カ所が知られた。縄文時代の住居址は第19号址であり、縄文中期の完形土器及び打製石斧が床面上より伴出した石囲い炉址を持つものであり、この住居址は後世の遺構によって一部が切合われているが、比較的良好に遺存されていたのである。プランは不明であるが、住居址の北部に検出された小ピットの配列より円形乃至楕円形を示すものではなかろうかと考えられる。

弥生時代の住居址として第1号址が知られ、中でも石廂丁が二個完形で出土し、その遺物が熱が加わっているのと、タールの付着が見られる点と床面上に検出された柱状炭化物とは、無関係とは考えられない。その他、また床面出土の土器片にもタール状の炭化物の付着が見られる。以上の諸点より、火災などによって生じた現象として理解されよう。

古墳時代の住居址が多く知られた中で、特に第2号址は注意すべきである。時期は土師式第I型式～第II型式に属する土器を伴出している^{註1}。中でも、S字口縁を有する台付壺形土器が、この住居址より十数個体以上出土したことは煮沸用具として、その生活のあり方に何を意味するかが提起される。また住居址内に川原石が多く見られた点も注意すべきである。第3、4、5、7、9、11、17号住居址は屋内にカマド及びその痕跡が認められる。カマドに使用された材料は土器、石、粘土であり、この中で石材は川原石と凝灰岩の差が認められた。また第10号址の床面上に凝灰岩が散在していたが、カマドの位置とは考えられなかった。

次に住居址中、柱穴及びピットで特長を示すものをあげると、第3号住居址の壁外に小ピットが並んでいる。また南部に一部張出が付設されていたと推定される小ピット群が見られた。

第11号址は長方形の張出が見られるものである。以上の住居址はカマドおよび痕跡を有するものであり、第4.5.17号址は土師式土器第三期に属する土師器が、カマド内及びその附近より伴出している。その他第3.5.9.11号址などの床面上より小破片であるが、この期に比定されるものが出土している点と、カマドの存在等を合わせて多少の前後の差があるが、土師式土器第三期の時期と考えられる。

住居址の切り合いによる前後関係について見ると、第3号址が第4号址の北西の部分と切り合っている。第4号址が第3号址に先行することが知られた、出土遺物より時期は第4号址とあまり時間的に差がない。

第6号址の南西部で第7号址によって切り合っている、第7号址の切り合った部分は貼床になっている。また第6号址の東壁の部分が第8号址によって切り合っている。この第6.7.8号址の前後関係は、第6号址は第7.8号址に先行することは明瞭であるが、時期を決定するに足る資料はなく不明である。また第8号址は、中世期の集石遺構によって複合されている。第5.8号址との切り合いの関係は、第5号址のカマドの位置の部分の壁にプランの一部が検出された。即ち、第8号址の廃棄された以後に第5号址が造られ、その切り合いの部分にカマドが造られたために、カマドの下にその痕跡が認められたのである。また第8号址は第9号址によって切り合わされているのである。この他第14.15号址は遺存状態も悪く、溝状遺構によって複合され時期は不明である。

古墳第1号墳は基底部分のみであるが、基底部分の石積の方法が目される。横に川原石を並べ、縦に長石を用いその間を小石で積んでいる。また、長石を用いない場合でも、小石で区間を意識している。それぞれの人によって、その区間が受持たれたかのようである。濠内出土の遺物は地点によって同一器種のものが見られるが、住居址が近くに存在している点よりして、副葬品または、築造以降の祭祀によるものと、すべてを決めることは出来ない。

第2号墳の出土遺物は、わずかに直刀、細頸瓶のみであるが、終末期の古墳である。

第3号墳は小形の古墳であるが、棺台の配石が見られた。第4号墳も同類の基底部分であり、いずれも古墳期最末のものである。第5号墳は古墳と決定するにはやや疑義があろうが、小児用の古墳と考えられる。最近の調査で他に同類のものが検出され今後の課題としたい。

土壙が10カ所知られた。遺物が遺存したものは、中世期の山茶碗片が混入したものが大部分であって、中でも大平鉢及び山茶碗二個が口を合わせた状態で出土した10号土壙は、その遺物より墓としての性格が推察される。

集石遺構は中世期の山茶碗を伴出し集石墓と推定される。溝状遺構は明確な時期は不明であ

るが、方形基底部の濠の南側を横切っている溝の上層部に山茶碗片が、下層部に須恵器片などが出土している。古墳時代のものと考えられるが、別項においてもふれたように他の溝と連結しているが、同一溝であるかは不明である。

出土遺物で縄文土器の中で特に注意すべきことは、2類、3類に見られる西日本的な船元式土器が出土している。最近飛騨川流域においても資料が知られる。また里木Ⅱ式に類似するものも少量であるが出土している。これ等西日本的な土器に対して勝坂式土器系が知られる。中でも第19号住居址より出土した完形土器は、口縁に沿って鈎状の隆帯が繞らされ、内面に黒色の付着物が全面に見られる点は、長野県富士見町新道1号住居址出土の有孔罎付土器に器形上でも、また内面に黒色の付着物が全面に見られる点と、胎土も勝坂式土器に類似している。このように東日本的な土器と、西日本的な土器との接点が論ぜられるこの地域では、見逃すことの出来ない好資料である。中期では加曾利E式土器その他仮称姪子式などの他に、後・晩期の土器が少量であるが、出土している。

弥生式土器は前期の水神平式土器を始め、中期のものが少量であるが、出土している。また後期のものは東海地方欠山期のものが出土している。遺跡が複合しているのと、各期の小破片の遺物が混出しているので、土師器との区別がつけがたいものがある。

土師器は先に述べたようにS字状の口縁を持った台付甕形土器、その他のいわゆる古式土器に含まれる壺形土器、埴形土器など第Ⅰ、Ⅱ期にまたがる様相を示すものが見られる。特にS字状口縁を有する甕形土器は、この地方の土師器の編年の上で特に注目すべきである。次にⅢ期に属する甕、甔などが住居址中に知られ、その中で甕に特に口縁部が横に強く折れる特徴を示すものが多く見られる。

須恵器は無蓋高杯(挿図36の15)は、船載土器(陶質土器)と考えられるものが出土している。^{注3} 岐阜県下では、伝東天神山古墳群、遊塚古墳などに陶質土器の出土が知られる。また(挿図36の19)の有蓋高杯の表面にガラス質の黒い斑点状が知られる。この高杯も注意すべきものである。この他杯身と杯蓋を見ると關徳寺・岡・福田期のものである。また、有蓋高杯の中には陶区古窯址群のⅠ期に比定されるものも見られる。一、二を除いて高杯は口径に対して、脚部が短いものである。壺は福田期～高蔵期のものである。

広口壺(挿図37の1.4.5.6)は、いずれも口縁部に稜を有し、胎土が異なっている。この他の須恵器を含めて總括的に考察すると、二、三の例外を除いては5世紀から6世紀のものである。これ等の須恵器の中に第1号墳の副葬品が含まれていることが推察されるが、プライマリな状態で出土したのでなく、これ以上の推察は困難であるが、陶質土器を始め古い須恵器の出土は、可児町が東山道の要路としての位置をなしている、この地域での畿内的な遺物の出土は注目される。

この他8世紀代以降の遺物は白瓷の中で中世期の山茶碗などが多く出土している。また緑釉陶器の出土は、この遺跡の持つ歴史の変遷の中で理解されよう。

土製品、土偶は縄文期のものである。棒状両孔式土錘は弥生時代後期より知られる。また円筒形単孔式の土錘は古墳時代のもと考えられる。

石製品は、打製石鏃、打製石斧、磨製石斧、石錘、凹石、搔器などは縄文時代のもが大部分で、石鏃中に弥生時代のもが少量見られる。砥石はいずれも金属器を磨いたものであり、弥生時代以降のもたと推定される。また、石包丁は弥生時代後期のものである。滑石製模造品が出土している、これらの遺物と祭祀遺跡との関係は本遺跡の歴史的考察の上で特記すべきことである。

先ず大和政権の東国経営の官用道路として古東山道がこの地域と考えられる。これは「延喜式」の記載された東山道の駅に可児駅を通っていることは、古東山道と全く別とは考えられないこと。それに神坂峠西部に知られている祭祀遺跡を、大和政権の東国経営の官用(軍事)道路と関連するとするならば、それ等の遺跡中でも八百津祭祀遺跡群は木曾川沿いに立地し、本遺跡も木曾川沿いに見られる、また祭祀遺跡の第Ⅰ期は、4世紀～6世紀はじめとされ、第Ⅰ期には畿内的な遺物が知られる。^{注4}この点でも当遺跡においては、遺物に畿内的要素が見られる。今後、古東山道を考察する上に注目される遺跡である。上記のように当遺跡は縄文時代より中世にかけ、各期に互る要地として役割を果たしてきた事が知られた。(大江 命)

注1 土師式第Ⅰ型式～第Ⅱ型式の基準は土師式によるものである。東海地方では大参廟年におけるB類を主体とするものである。土器集成

2 藤森栄一編「井戸尻」中央公論美術出版 昭和40年7月

3 田辺昭三氏の教示による。

4 「岐阜県史」原始編

圖 版



発掘以前の遺跡の状況



遺跡の全景



第2号住居址



第3号住居址



第1号住居址内の出土状態



第2号住居址内の出土状態



第5.8.9.10号住居址



第11.12.13号住居址



第17号住居址



第19号住居址内の炉址



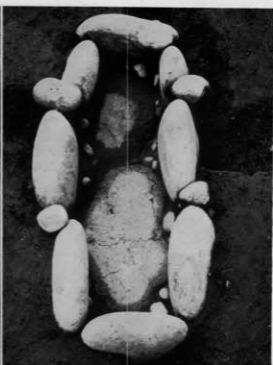
第19号住居址内の出土状態



第17号住居址内のカマド



第3号墳



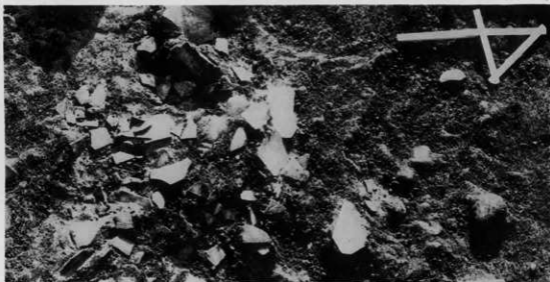
第5号墳



第2号墳



D7における濠内の層序



濠内の出土状態



集石遺構



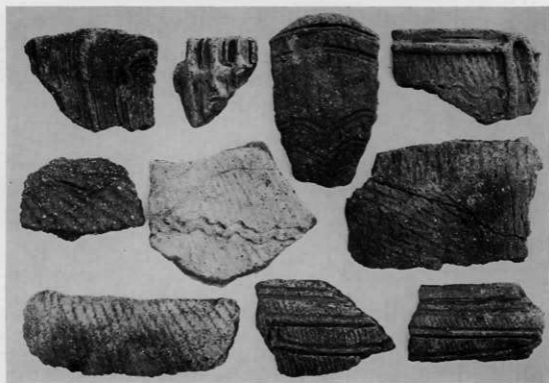
第2号住居址内出土状態



土墳墓内出土状態



須惠器出土状態



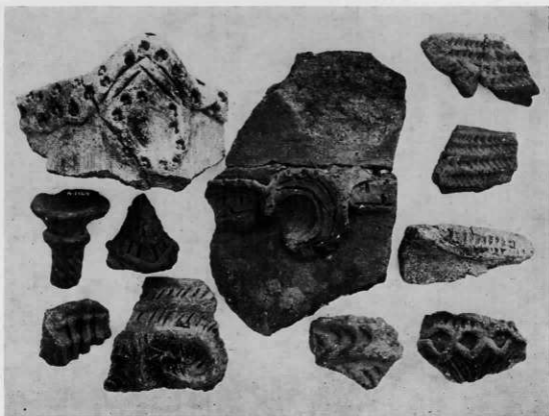
1 繩文式土器



2 繩文式土器



1 繩文式土器



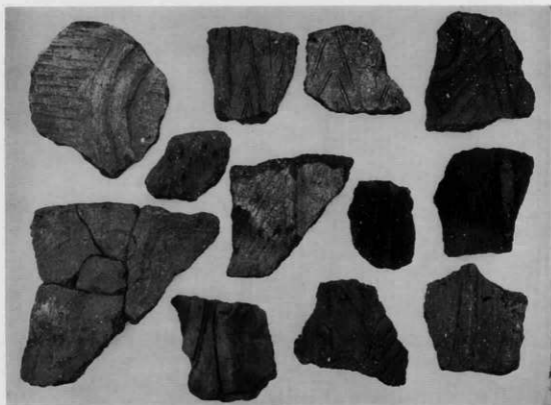
2 繩文式土器



1 繩文式土器



2 繩文式土器



1 縄文式土器



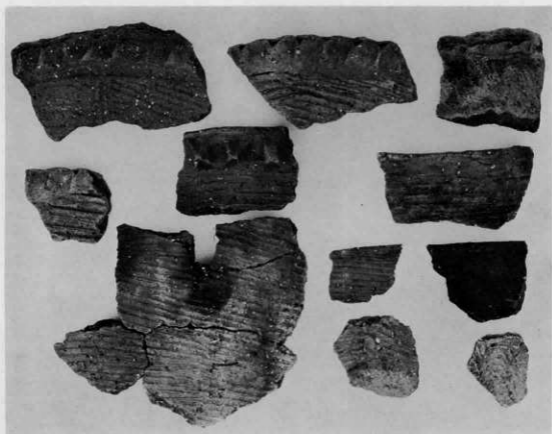
2 縄文式土器



1 縄文式土器



2 縄文式土器



1 弥生式土器



2 弥生式土器 etc.



1 弥生式土器



2



3



4



5



6



1



2



3



4



5



6



7



8



1



2



3



4



5



6



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



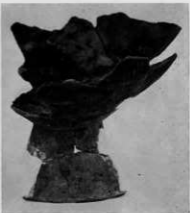
11



12



13



14



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



1

2

3



4

5

6



7

8

9



10

12

13

14



1

2

3



4

5

6



7

8

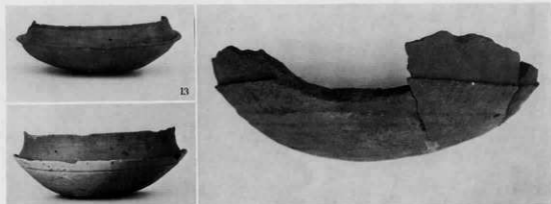
9



10

11

12



13

14

15



16

17

18



1



2



3



4



5



6



1



2



3



4



5



6



7



1



2



3

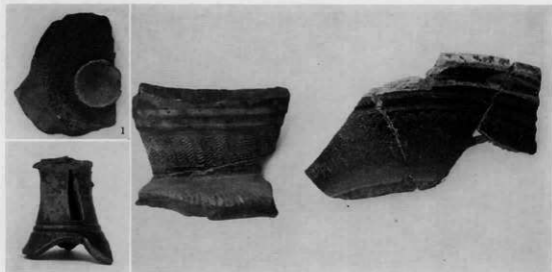


2'



4





1

2

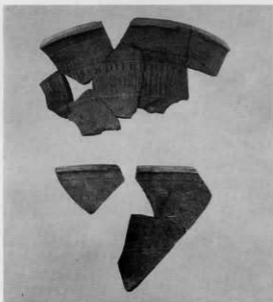
3



4



5



6



7



1

2

3



4

5

6



7

8

9



10

11

12



1

2

3



4

5

6



7

8

9



10

11

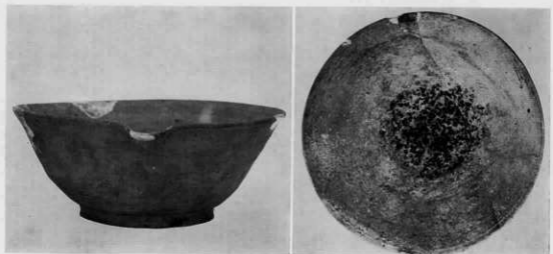
12



13

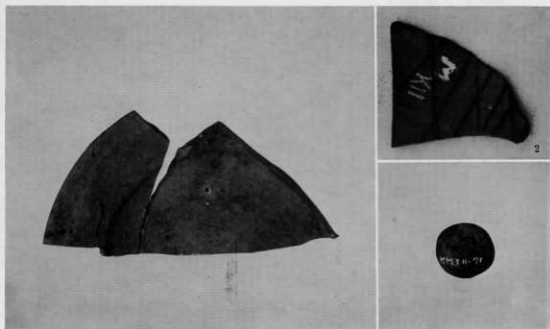
14

15



16

17



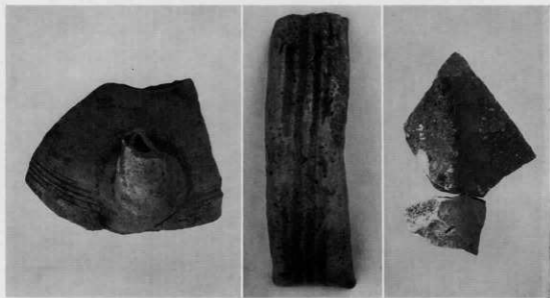
1

3



4

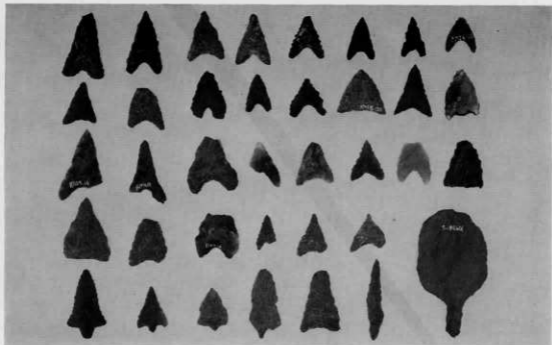
5



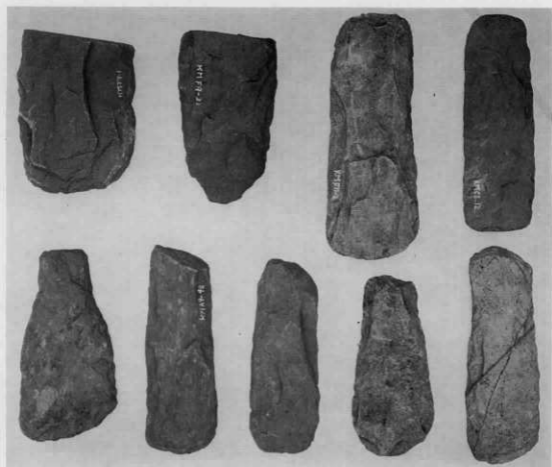
6

7

8



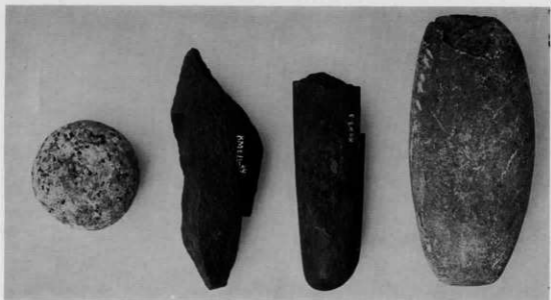
1 石鏃・石錐



2 打製石斧



1

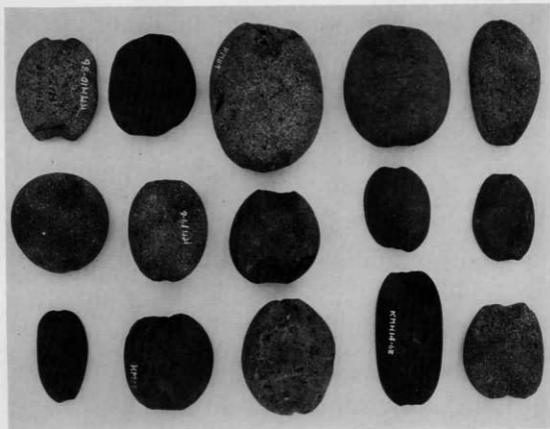


2



3

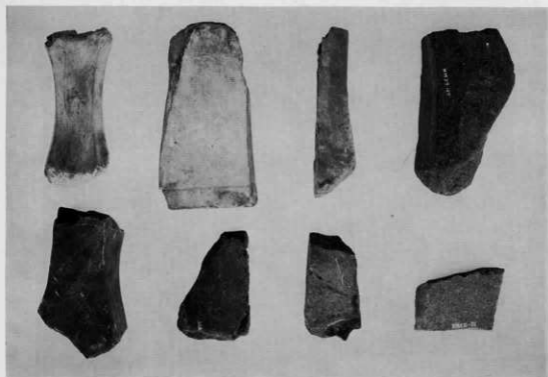
4



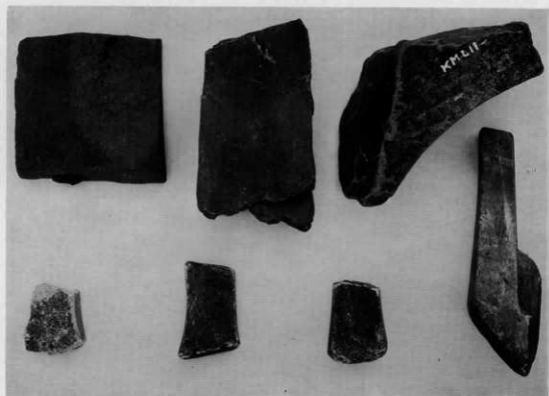
1 石 錘



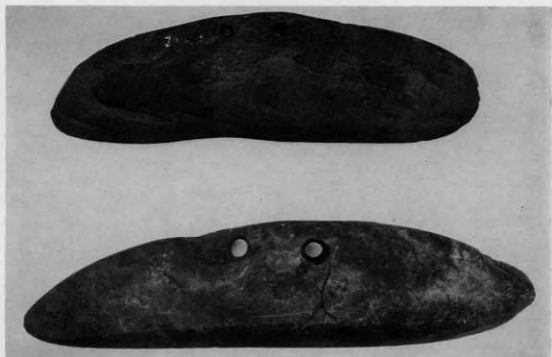
2 石 錘



1 砥石



2 砥石



1 石包丁



2 玉類



3 滑石製模造品



1 直刀



2 土偶・土鐘



3 鉄鏃

「本書に掲載した空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の空中写真を複製したものである。
(承認番号) 昭 5 0 部 複、第 2 6 9 号」